築館町史資料

築館町嘉倉貝塚調査概報

――宮城県下に於ける最奥部の貝塚――

築館町文化財保護委員会

築館町史資料

築館町嘉倉貝塚調査概報

――宮城県下に於ける最奥部の貝塚――

築館町文化財保護委員会

目　次

Ⅰ、まえがき……1
Ⅱ、嘉倉貝塚研究小史……1
Ⅲ、嘉倉貝塚の立地環境……2
Ⅳ、出土遺物……4
A、土　器……4
b、石　器……26
土製品……28
C、自然遺物……28
Ⅴ、甕棺墓……28
Ⅵ、まとめ……38
Ⅶ、おわりに……39
主要参考文献……39
あとがき……41

「宮城県栗原郡築館町嘉倉貝塚」

――宮城県下に於ける最奥部の貝塚――

I　まえがき

宮城県北部の登米・栗原両郡にまたがる伊豆沼、長沼、内沼等の湖沼群は、現在、水利、漁業、観光等の面で地域住民に多くの恩恵を与えているが、はるか数千年の昔から、往時の住民が多大の恩恵をこうむって生活を営んでいた事が知られる。

それは、これら湖沼群の周辺に分布する多数の遺跡の存在から言う事ができ、しかも、遺跡内部に貝塚を形成する場合が多い事も、湖沼に対する食料資源の依存度の一端を示している。

ここに報告する嘉倉貝塚は、現伊豆沼の南西約二キロメートルの地点に所在し、伊豆沼、長沼周辺に分布する諸貝塚の内、その最奥部に位置する。

II　嘉倉貝塚研究小史

嘉倉貝塚は、古く江坂輝弥氏が踏査し、その記録が「貝塚二九号」に載っているが、その時既に、地元では承知の貝塚であったろう。恐らく大正年間築館中学（現築館高校）に在職していた故池内儀八氏等によって発見、調査されたものと考えられ、当時採集された池内コレクション中に、当貝塚の縄文晩期土器若干が保管されている。

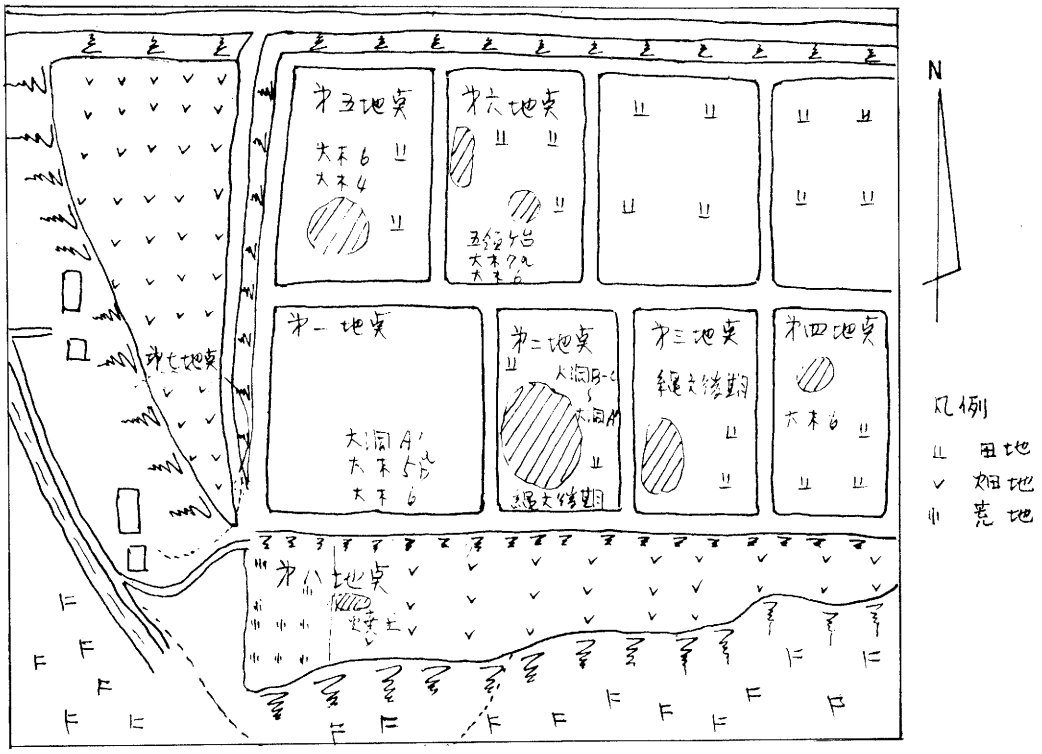
昭和三十年代には、興野義一氏による迫川流域の地域的研究が行われ、本貝塚の学問的な観察がなされた。

昭和三十年代の後半には、附近の河川の堤防工事の為、遺跡の南西部が削られ、南西部斜面にあった貝塚部分のほとんどが破壊された。

其の後、好事家や学童による表採以外、学術的調査の一切行われないままに、昭和四二～四三年にかけて行われたブルトーザーによる開田工事により、遺跡の大部分が破壊されてしまった筆者が工事を知ったのは、四三年一月末で、早速遺跡を訪ねた。が、その時工事は一切終了し、ブルトーザーの引き上げた後であった。

しかし遺跡内には多量の土器破片等が散乱し、ある地点では上部を削られた土器下半部が落ち込んだ黒土層中に残存していたりといった状況で、又、地点によって年代の相違が認められる処もあったので、遺物の採集に当って、できる限り地点毎に区分して採集した。**（略図１）**

略図1　嘉倉貝塚略図



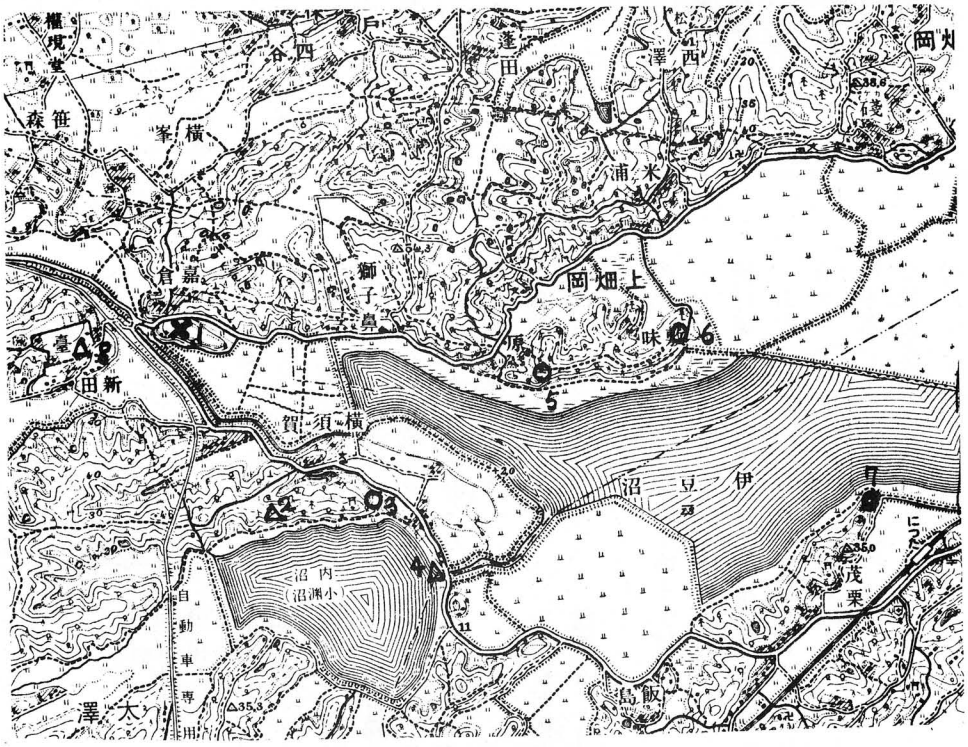
数日後、再度遺跡を訪ねたところ、遺跡の一部に大きな掘込みがあり、又、各処に無数の穴が掘られていた。この大きい掘込みからは、後日縄文晩期末の甕棺が発見されていた事が判明した。又、小さい掘込みの一部の壁面に大木六式が下層に、五領ヶ台式と大木七a式が上層にという上下関係を確認することができた。

更に本年一月、現在わずかに残っていた畑地のゴボウ掘りをした際、土器片が出土したとの報で踏査したところ、地表下五十センチメートル前後の深さに焼土層の広がりが見られ、或いは住居跡の一部かと推定、そのまま埋め戻した。尚、焼土層の周囲からは、福浦島下層、大泉、桝形囲式に類する土器細片を数十片採集し、その内の底部破片内面に籾痕圧痕らしきものを検出した。

III　嘉倉貝塚の立地環境

嘉倉貝塚は宮城県栗原郡築館町玉沢字嘉倉にある。築館市街地から東方約四キロメートルの地点、県道湯沢～志津川線から畑岡を経て若柳に抜ける道路分岐点の中間にある南北八十メートル、東西四〇〇メートルの細長い丘陵の西端部に南面して遺跡は形成されている。遺跡南側田地との比高約十メートル、標高約二四～二五メートルを算し、遺物の散布は巾約六十メートル、長さ約八十メートル程の範囲に見られる。

この貝塚の所在する丘陵は旧畑岡村を内包する伊豆沼の北岸に発達した丘陵で、伊豆沼南東岸の新田丘陵は、更に長沼の西



1.嘉倉貝塚　2.砂子崎遺跡　3.横須賀貝塚　4.浄土遺跡　5.原貝塚
6.敷味貝塚　7.唐木崎貝塚　8.玉荻台遺跡

図版 1　　上　嘉倉貝塚近景（南方より）
　　下　嘉倉貝塚周辺の貝塚及び包含地

岸をも劃し、その周辺に多くの貝塚を残している。

この貝塚群は広い意味で〝迫川流域の主淡貝塚群〟に含まれ更に広義には、仙台平野の貝塚群の一部をなし、その北限に位置するものといえる。

嘉倉貝塚周辺には対岸の玉荻台遺跡を初め、伊豆沼西岸の原貝塚、敷味貝塚、同東岸の唐木崎貝塚、内沼北岸の砂子崎遺跡横須賀貝塚、同東岸の浄土遺跡等が分布する。（**図版1**）

これらの貝塚、包含地は、いずれも縄文後期後半から同晩期を主体とする遺跡で、貝塚はいずれもカラスガイ、オオタニシ、イシガイ等の淡産貝類を主とした主淡貝塚に限定される。

長沼周辺や迫川下流では縄文前期初頭から貝塚が形成されており、嘉倉貝塚は伊豆沼、内沼周辺では最も古い縄文前期大木四式期から始まっている。

Ⅳ 出土遺物

本遺跡から採集された遺物には、土器、石器、土製品、石製品等の人工遺物と、貝類、鳥獣魚骨等の自然遺物がある。

まず第一に遺物の大部分を占める土器から順次記述してゆこう。

A 土器

本遺跡から発見された土器には、数点の完形もしくは復原可形土器と、魚平箱十箱に及ぶ土器破片がある。

前述した様に、これらの遺物は、いずれも正規の発掘調査によって得られたものではなく、遺跡の破壊後に表採したものが大部分を占め、従って土器の分類、石器類の伴出関係を知る上で非常な障害となっている。

本稿では、地点毎に区別して採集したものを主に、東北地方南部の編年と照合しつつ大雑把に分類した。（**表 1**）

◎第一群土器 （**図版2の1～7**）

平縁又は、大ぶりな対象的な位置に一対の波状口縁を有する深鉢形土器又は、石炭バケツ形土器（図版2の1）等があり、模様としては地文としての粗大な斜行縄文の上に三～四ミリメートルの粘土紐を貼りつけたもので、その多くは梯子状文といわれるモチーフを組合わせたものが多く、同時期の他の遺跡に普遍的な鋸歯状文が少い。

器厚六～十ミリメートル、色調は暗褐色～赤褐色、第五地点出土例が大部分を占める。（**図版 2・3**）

◎第二群土器 （**図版3の1～11**）

すべて平縁で深鉢形、甕形等の器形がある。一群土器同様、斜行縄文の上に粘土紐を貼りつけたもので、まれに無文のものもある。粘土紐のモチーフとしては、鋸歯文が圧倒的で縦位に施文される場合も多い。粘土紐は、第一群ではその屈曲部が丸味を帯びていたのに本群では鋭角をなし、丁度折りたたんだ様な状態を呈する。本群は第一地点の北半部、次の第三群土器の附近に多く見られた。

表　1

縄文式、弥生式土器編年比較表

日本の考古学Ⅱ，Ⅲより（一部加筆）

	北　関　東	東　北　南　部	嘉　倉　貝　塚
	早期以前省略		
縄文前期	菊　名　Ⅱ	室浜，上川名Ⅱ	
	野　　中		
	二　ツ　木	桂　　島	
	関　　山	大　木　1	
	黒　　浜	大　木　2 *a*，2 *b*	
	水　　子	大　木　3	
	四　枚　畑	大　木　4	第1群
	草　　花	大　木　5 *a*（5 *b*）	第2群，第3群
	十　三　菩　提	大　木　6	第4群
中期	五領ケ台，下小野	大　木　7 *a*	第5群，第6群
	阿玉台　Ⅰ	〃　7 *b*	
	〃　Ⅱ	〃　8 *a*	（＋）興野氏資料
	〃　Ⅲ	〃　8 *b*	
	加曽利 *E* Ⅱ	〃　9(古)	
	〃　Ⅲ	〃　9(新)	
	〃　Ⅳ	〃　10	
後期	称　名　寺	（＋）	
	堀の内　Ⅰ	袖　　窪	
	〃　Ⅱ	宮　　戸　1	（＋）興野氏資料
	加曽利　*B* Ⅰ	〃　2 *a*	（＋）
	〃　*B* Ⅱ	〃　2 *b*	
	〃　*B* Ⅲ	西　ノ　浜	第7群
	曽　　谷	宮　戸　3	
	安　行　Ⅰ	〃　4	
	〃　Ⅱ	〃　5	
晩期	〃　Ⅲ *a*	大　洞　*B*	第8群
	姥　山　台	〃　*B*－*C*	
	安行Ⅲ *C*　前浦	〃　C^1	第9群
		〃　C^2	
	杉　田　Ⅱ	（＋）	第10群
	千　　綱	大　洞　*A*	
	荒　　海	〃　*A*′	第11群
弥生中期	岩　櫃　山	福浦島下層	第12群
	野　沢　Ⅰ	大　　泉	（＋）
	〃　Ⅱ	榊　形　囲	第13群
後期	(＋)	円　　田	
	長　　岡	桜　　井	
		天　王　山	
	十　王　台	（＋）	

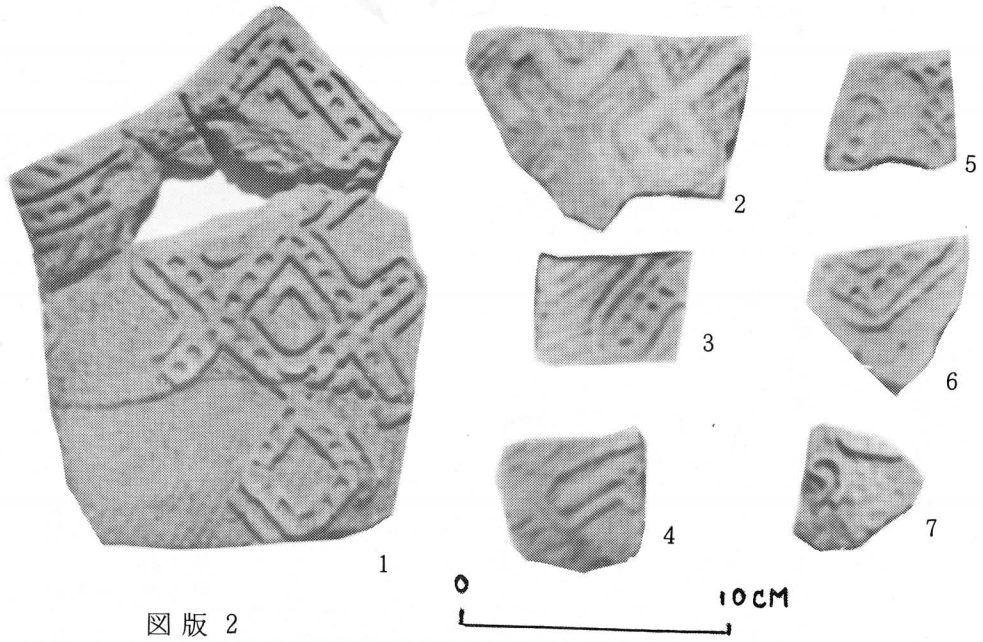


図 版 2

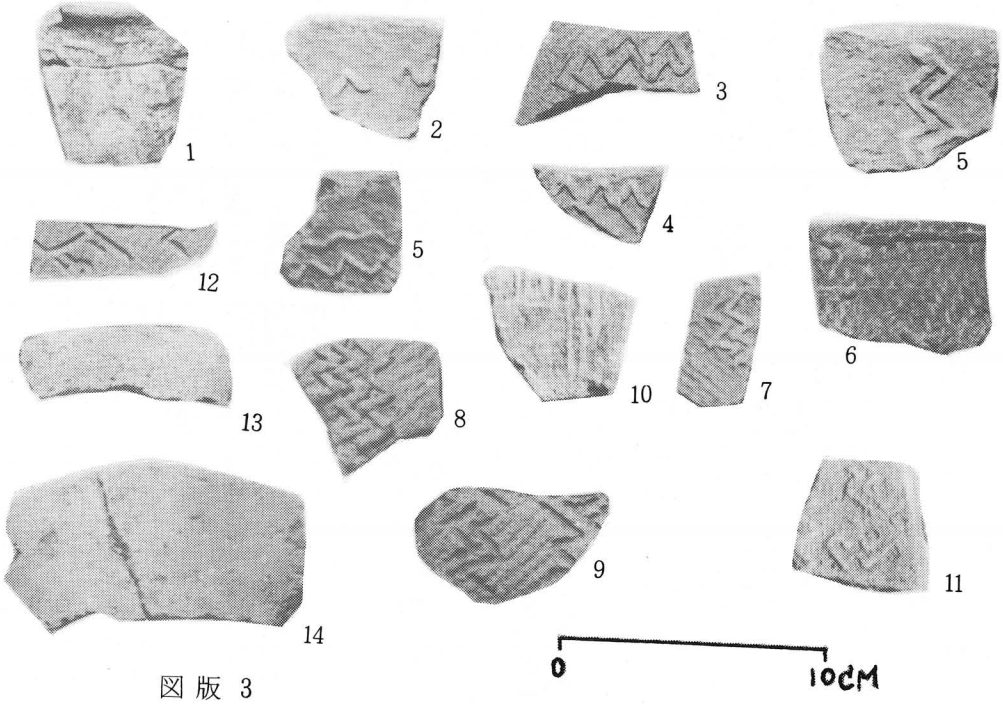


図 版 3

◎第三群土器　（**図版4、実測図1、2、拓影1**）

本群は第一地点の北半部から比較的まとまって採集され、一部に黒土層の落込みが残存しており、その黒土層を排除して復原土器一点を得た。

器形には、口縁がわずかに外反し比較的胴長な円筒形を呈するものと、口縁外傾し、頸部から胴部にかけてふくらむ甕形の二種があり、大木四式等と比較して器形の単純化が目立つ。

模様構成は大局的に見て二系統に分かれる。

その一つは、口縁部が肥厚し、細い粘土紐による鋸歯文、平行線文が見られ、口唇と肥厚した口縁部下端に刻文をもつもの他の一つは、口縁部に一条～三条の擬縄帯を有し、その下部に二条～三条の併行沈線により弧文、平行線文等の描かれるもの。

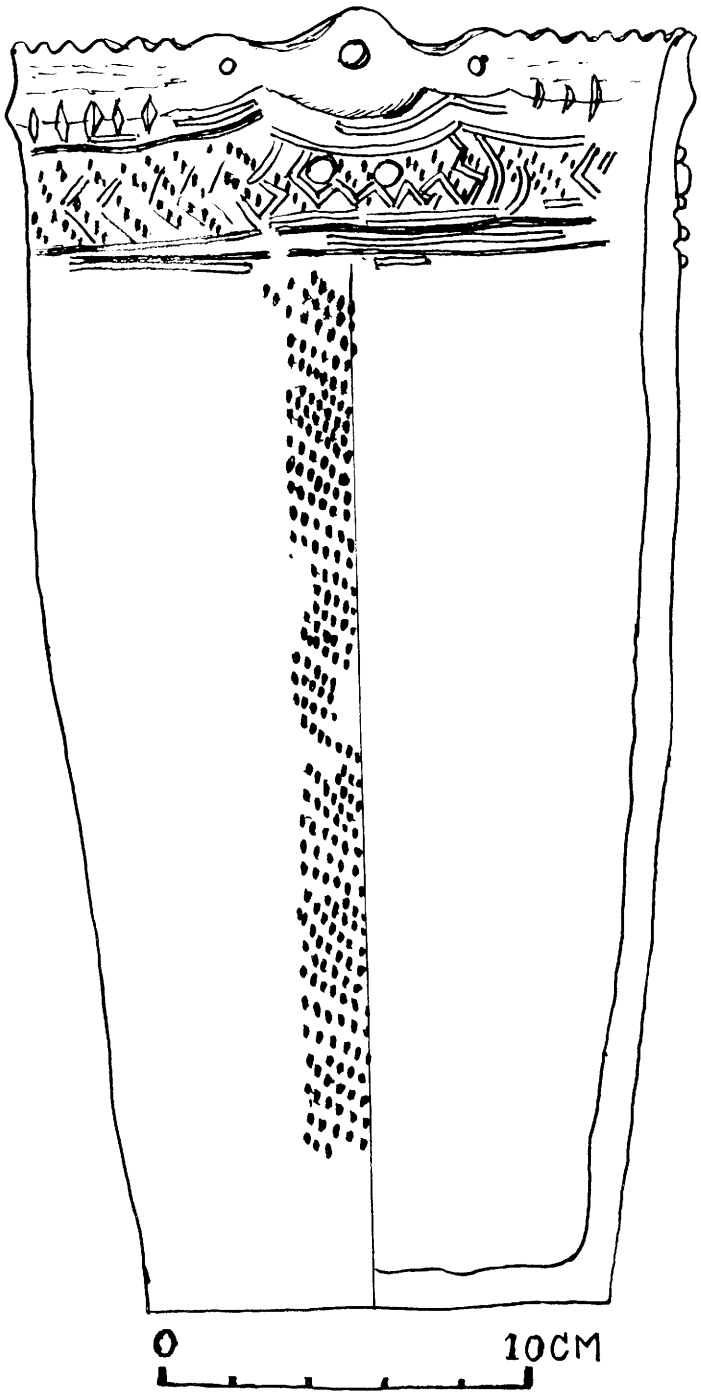
本群を更にA～Eに細分して詳述する

A類（**図版4の1～10、27～29、33、拓影4の1～5**
実測図1、2の1）

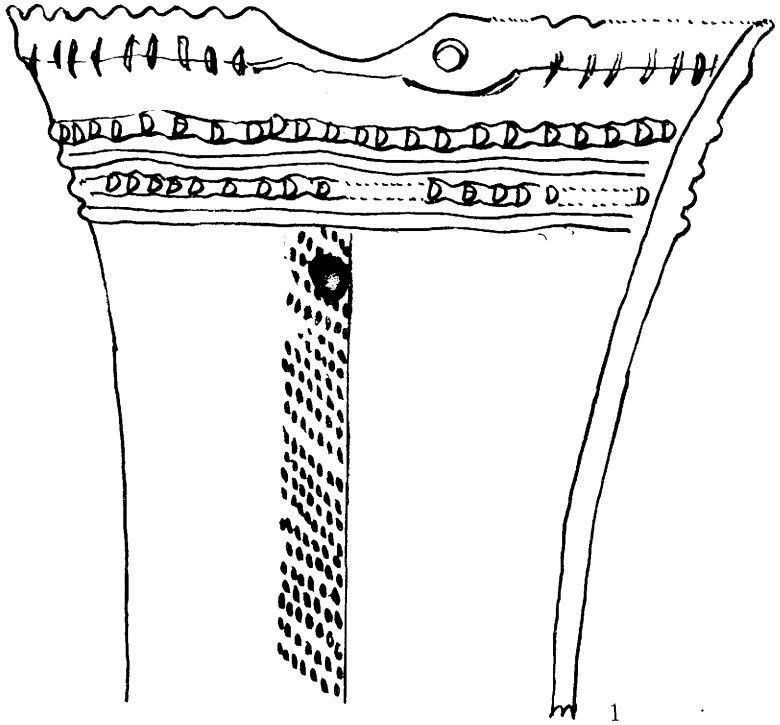
口縁部わずかに外反し、比較的胴長な円筒形、又は朝顔状に外に開く深鉢形の二者があり、口唇部は刻みによって小波状を呈し、向い合った対象的な位置に半円状のゆるい山形突起を作り出し、その突起の中央に一孔をうがつ。口縁上部では段を形成し、その下端も口唇部同様の刻み目が見られる。その下部には、細い粘土紐による鋸歯文が一～二段見られ、二～三条の粘土紐によって画される。模様帯の下部には斜行縄文が底部附近まで及んでいる。

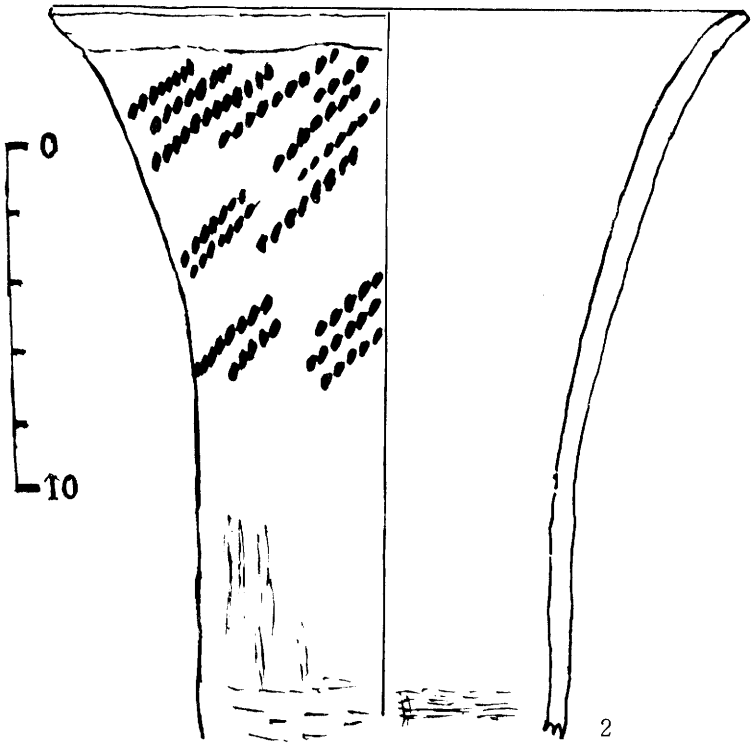
1
2
3
4
12
5
6
8
9
14
13
10
16
15
11
7
20
23
17
25
22
26
21
18
30
27
19
31
28
34
32
29
33
30
0
10CM

図 版 4

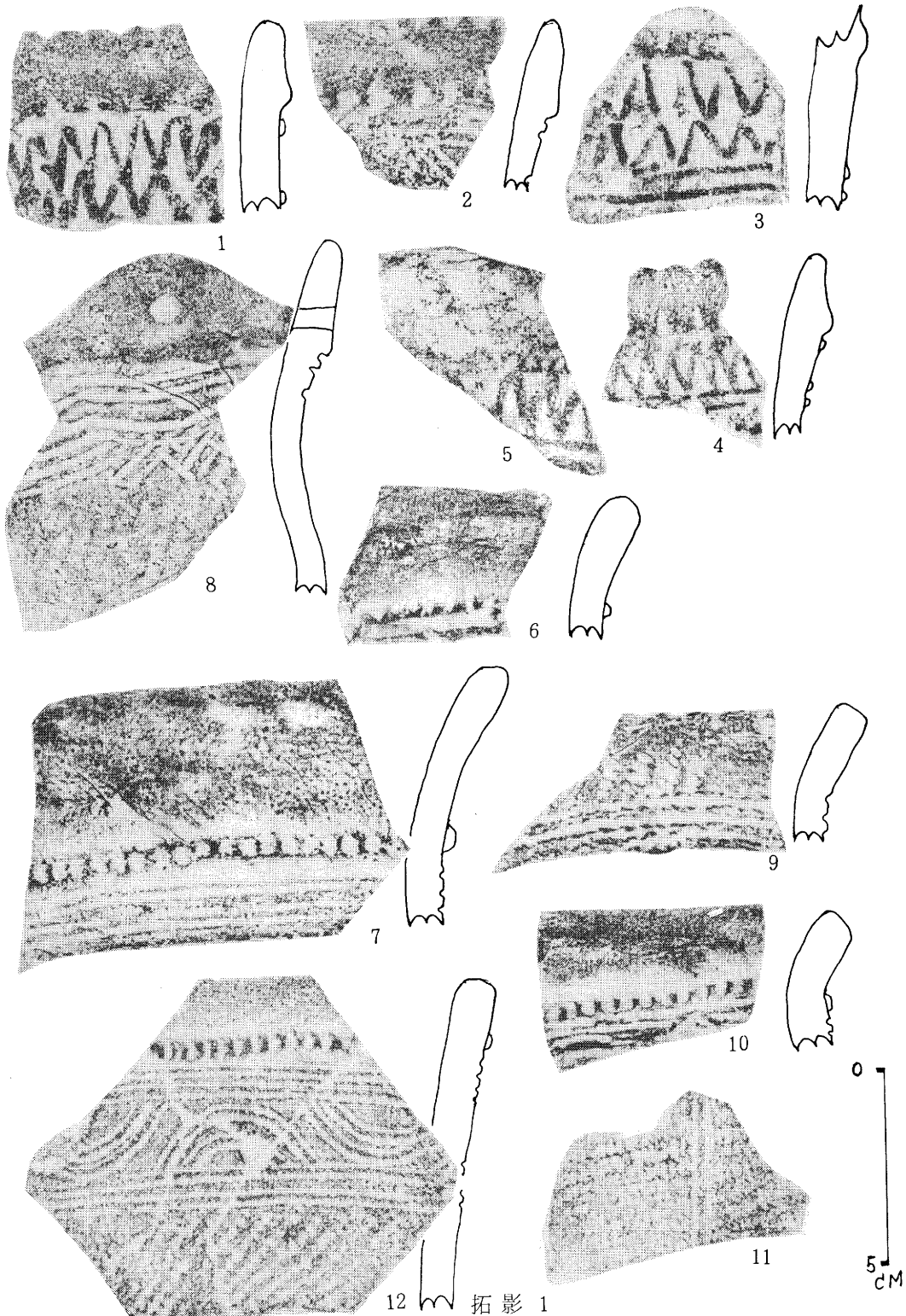


実測図 1





実測図 2



拓影 1

B類（**図版4の5、6、10、11、23、拓影4の8、2**）

口縁の形態装飾は、A類と同じであるが口縁下部の模様帯が併行沈線文によっている点で異なる。沈線文には先端二又の工具によって描かれた併行、鋸歯文等がある。器形はA類と同様な深鉢の他に胴部のふくらむ甕等もある。

C類（**図版4の12～15、拓影4の6、7、10、12**）

器形には口縁が外傾直行する深鉢と、口頸部でかなり強く外反する深鉢又は甕等が考えられる。

前者は口縁上部に後者には口頸の収縮部に夫々一条の刻み又は刺突を有する隆起帯が廻り、口縁上部を限っている。隆起帯の下部には二～四本を一組とする施文工具により、平行線文、弧文等が描かれる。口頸から強く外反するものの口縁は、やや厚さを増す傾向にある。

D類（**図版4の30、31　実測図2の2**）

装飾帯がなく、器全面に斜行縄文の見られる例で、30、31は第二群土器に伴うのか明確でない。実測図2の2は確実な唯一の資料で、口縁に向って朝顔状に開く比較的胴長な深鉢である。

口唇は外向にそがれ、口縁上部に狭い無文帯を残し、下部に左傾斜縄文が密に施文されている。

E類

A～D類以外の土器群を一括した。

(1)　胴部に巾広い粘土紐を貼りつけ、竹管様の工具で連続刺突したもので、その上部に鋸歯状の貼り付けをもつ。（**図版4の17～19**）

(2)　平縁、波状縁で口縁は肥厚せず、二～三条の併行沈線による模様が見られる。（**図版4の21、26**）

色調は白褐色、褐色、暗褐色を呈しているが、前二者が多い。器厚五～一〇ミリメートルで七～八ミリメートルのものが圧倒的に多い。

胎土には砂粒を比較的多く含み、ガサガサした感じのものが多い。

以上第三群土器を五類に細分したが、出土状態や施文手法、器形其の他の面で、互いに密接した関係にあり、一つのグループとして取扱う事が可能である。

本群は、従来第二群土器と同一型式に扱われ、縄文前期後半形式の大木五式とされてきた。近年、小笠原好彦氏は大木囲貝塚と糠塚貝塚の資料を元に、東北南部の前期末～中期初頭の土器について論考され、就中、大木五式と大木六式の中間に未命名型式を設定されたが、論文中に使用された資料は、第三群土器と同様の特徴を有している。

更に興野義一氏は、長者原貝塚出土の多量の一括遺物を元に大木五式をa、b式に二分し、長者原貝塚出土土器を大木五b式の示準資料とする説を発表された。

長者原貝塚出土土器は、第三群土器と全く同じ諸特徴を有し両者を同一型式として扱う事は極めて妥当と考える。興野氏提唱による大木五b式土器は既述の四遺跡以外に、栗原郡花山村原井田、同郡一迫町川口姥沢、気仙沼市磯草貝塚等にも見られ、

近　似例は更に遠く山形県遊佐町吹浦遺跡にまで及び、研究の進展に伴ない、恐らく大木六式等と同様の分布圏をもつのではないかと考えられる。

◎第四群土器（**拓影2、3、実測図3、図版6の1**）

平縁又は二対の大波状口縁をなす深鉢又は、甕が一般的で、まれに球形の胴部に台状の底部をもつ鉢がある。

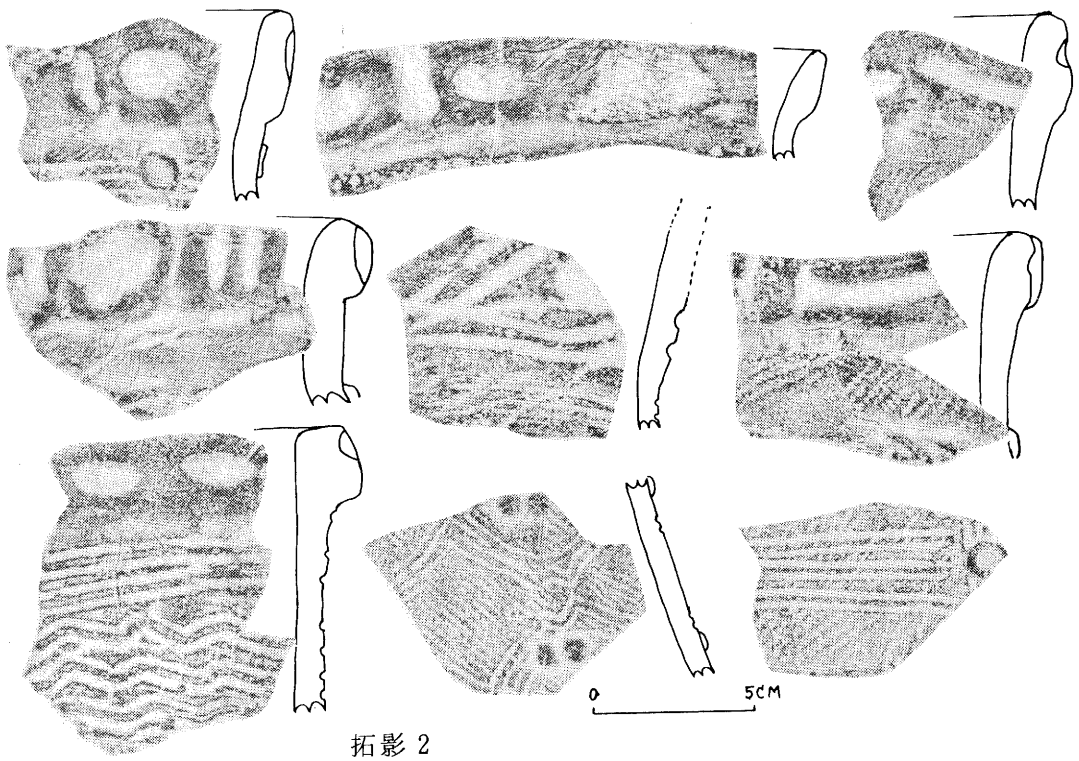
口縁部は、外反し膨らむものが多く、模様帯は第三群の退化又は発展した様相を呈している。但し、この時期の後半になると、比較的模様帯が発達してくる。（**拓影3の1～7**）

口頸部から底部近くまで斜行縄文が施文され、その上に半裁又は四裁された竹管を用いて描いた併行沈線文により各種モチーフが大胆に描かれる。そのモチーフの接点には、一～二個を単位とした円形貼付文が見られる。

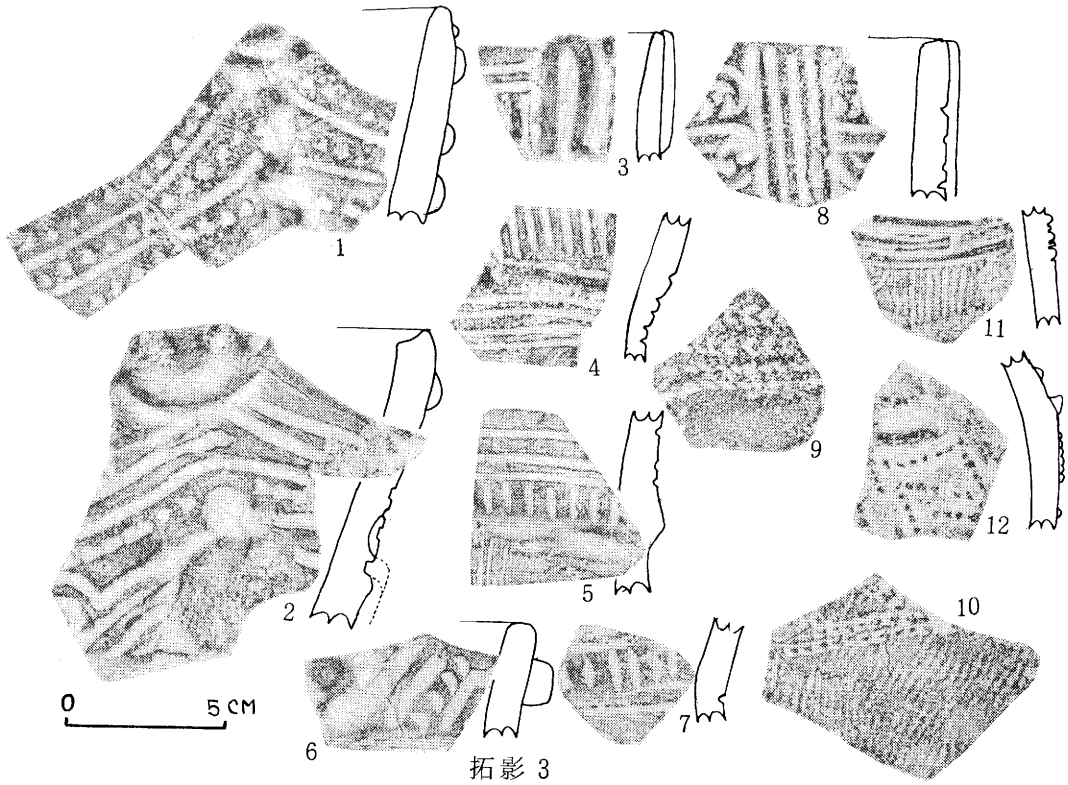
又、口頸部にしばしば擬縄貼付文の見られる例がある。この手法は、口縁部に見られる円形又は楕円形の凹文と共に、第三群土器の名残りであろう。拓影3の12は、関東地方の十三菩提式の仲間で、県内では糠塚貝塚、長根貝塚等、一般的にこの時期の土器と併存しており、これより北には余り入っていない様である。

◎第五群土器（**図版5の1～13**）

深鉢又は鉢があり、口縁部は複合をなし、内反するものが多く、複合口縁をなさないものには内側に肥厚させるものがある。第四群に見られた大波状口縁はなく、小さな突起が見られる。



拓影 2



拓影 3

模様は縄文、撚糸文、綾絡文、貼付文、絡状体圧痕文？、縄押文、沈線文等多種に渉るが、縄文と綾絡文を併用したものが多く、綾絡文は横位、縦位の二者がある。又、無文の土器や、大形の土器で華麗な模様をもつもの（図版5の12）に見られる渦巻状の貼付文は縄文中期に大発達をとげる渦巻文の先駆をなしている。底面に網代圧痕をもつ例がある。

◎第六群土器（**図版5の15、16、拓影4の1～6**）

図版5の15、16は黒褐色を呈し、繊細な沈線文と刻み文、交互刻み文をもっている。この二例は関東地方の五領ヶ台式土器そのものといっても過言でない。これと同様な土器は、遠田郡涌谷町長根貝塚や登米郡迫町糠塚貝塚等で発見されており、大木七a式と共存している。

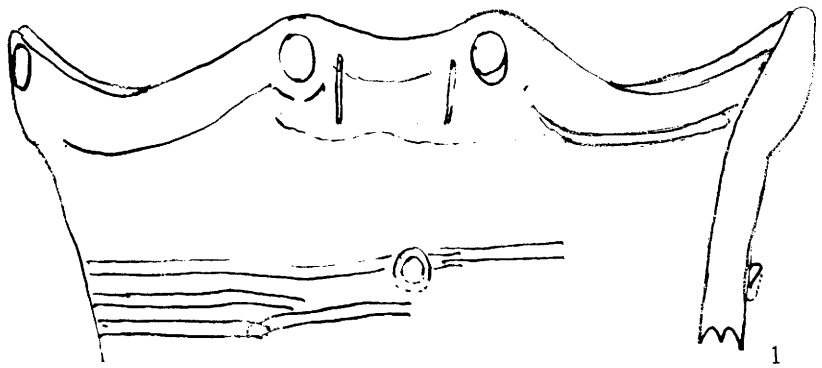
本遺跡出土の大木七a式、五領ヶ台式両者を比較すると、五領ヶ台式の方が施文手法、模様の点で洗練された感じを受け、胎土、器面調整の面でも精選、入念になされている。

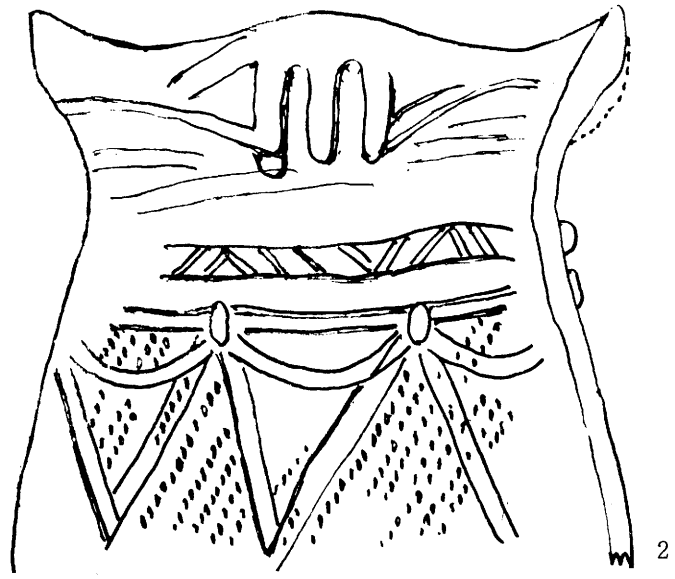
◎第七群土器（**拓影5の1～20、実測図1～4**）

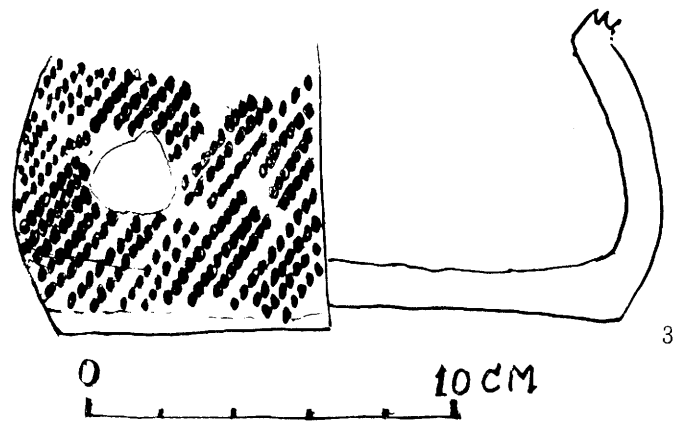
縄文後期後半に属する土器を資料が少ないので一括した。宝ヶ峰式に併行するもの（拓影5の7～9）金剛寺式に併行するもの（拓影5の20）後期終末の入組文系の土器（**拓影1の5、16**）等各種がある。

◎第八群土器（**拓影6の1～13**）

縄文晩期初頭の大洞B、B－C式に類する土器群、単純な深鉢、内屈する鉢、透しのある香炉形、高坏等が推定できる。







実測図 3

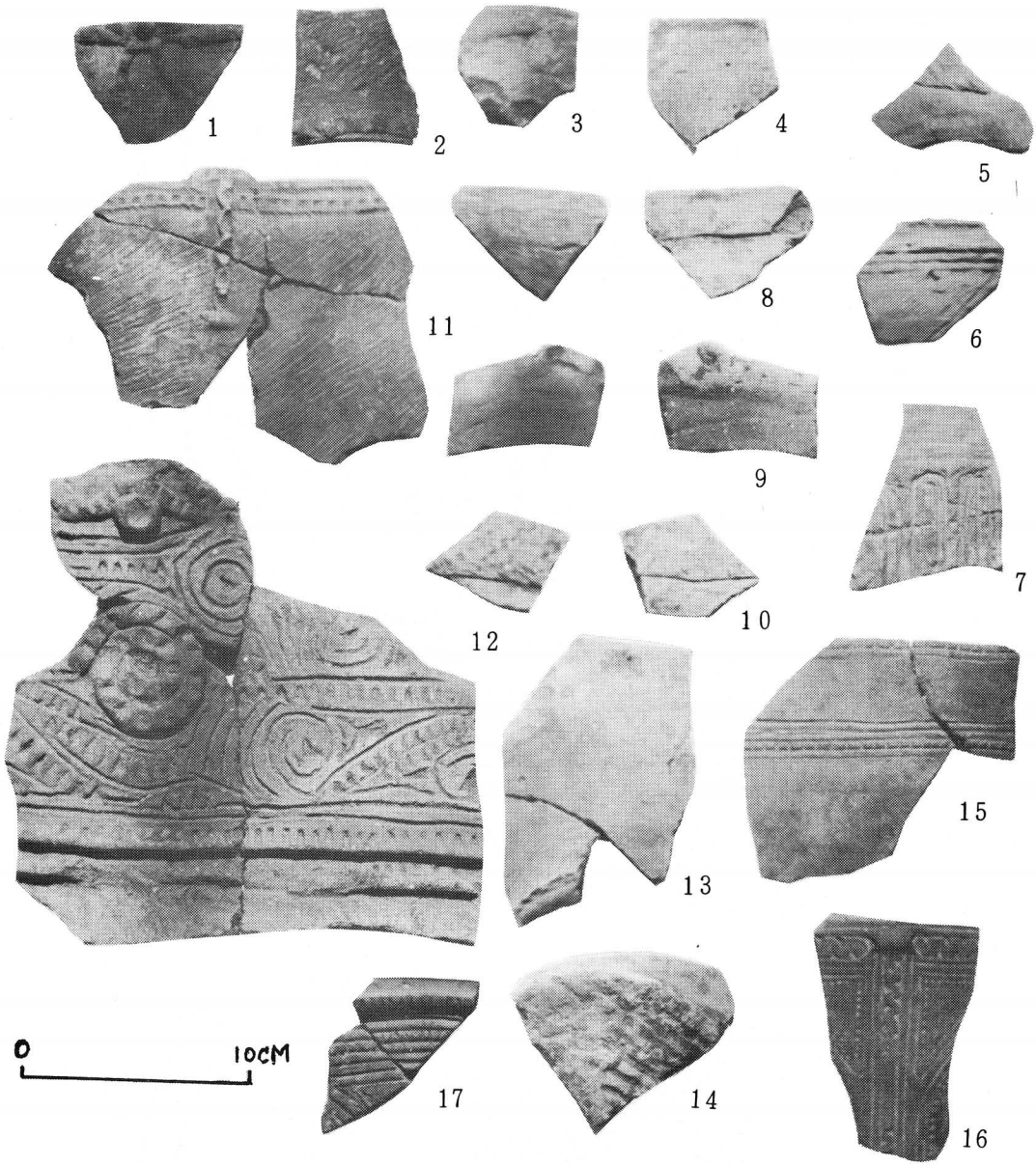
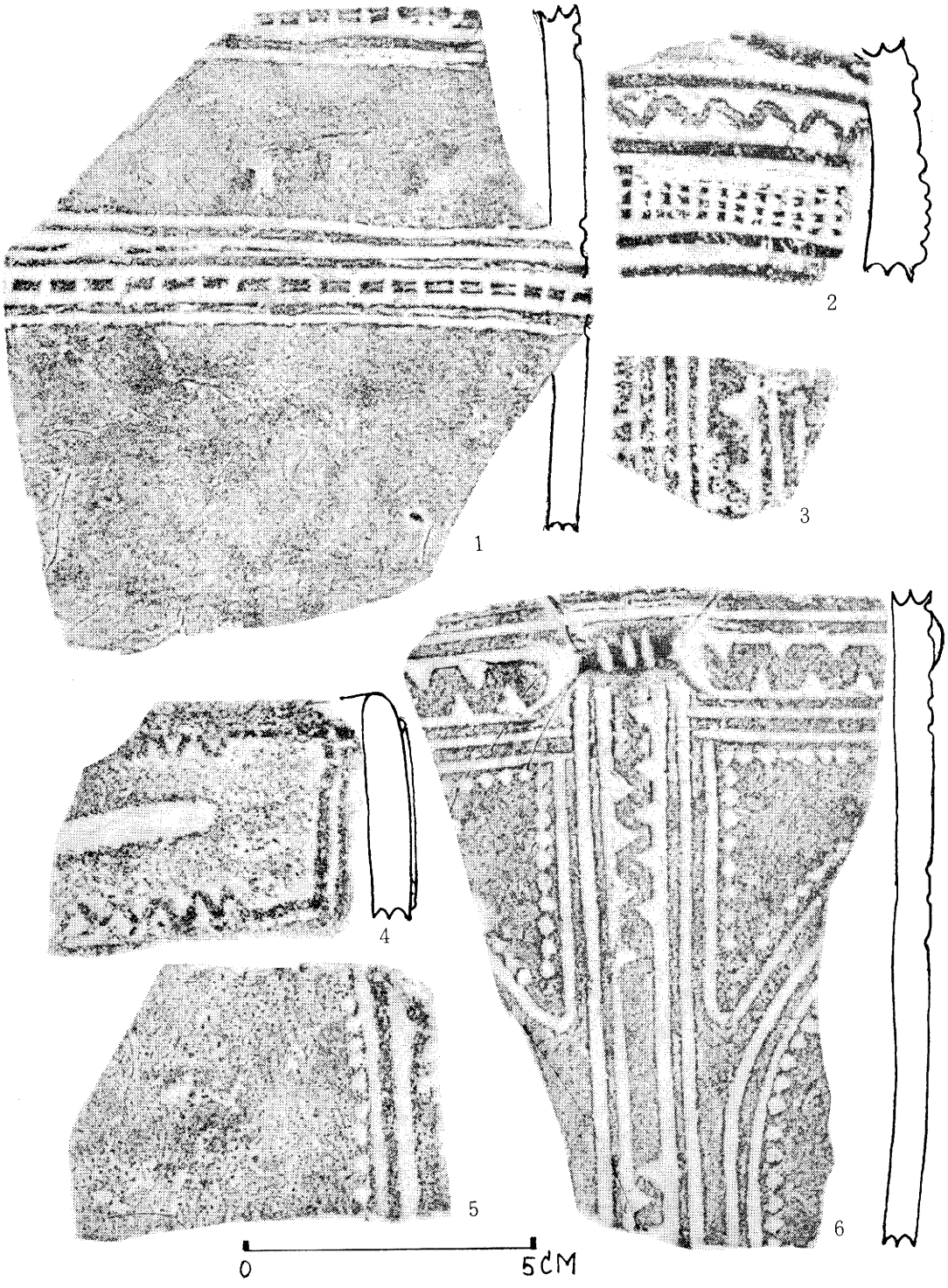
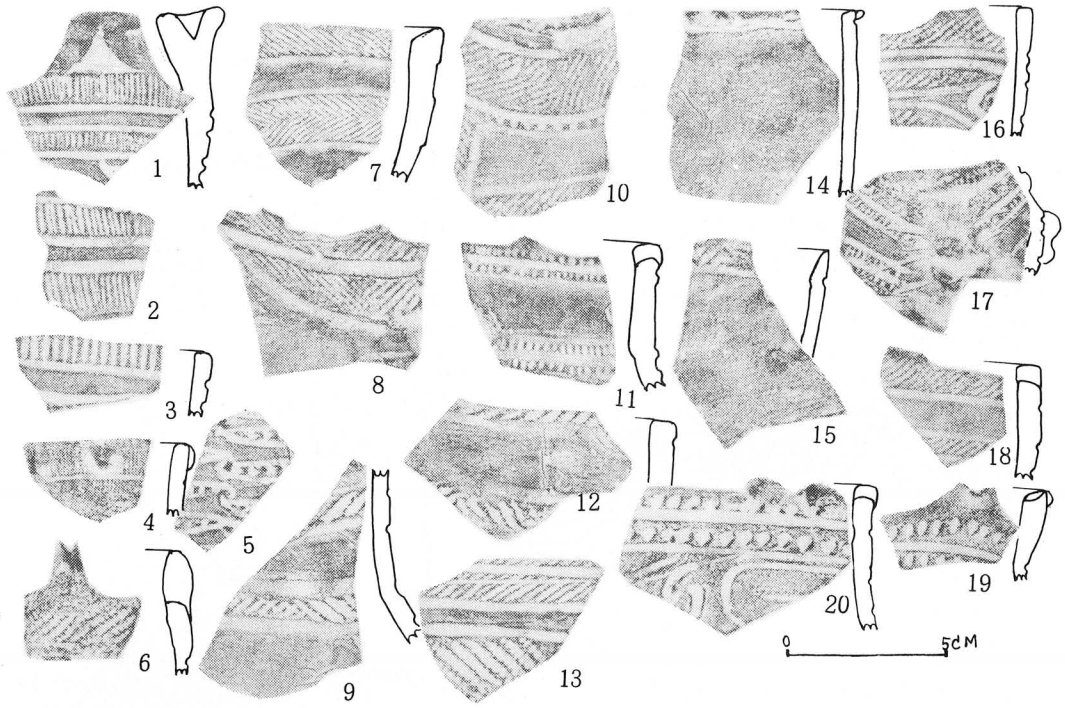


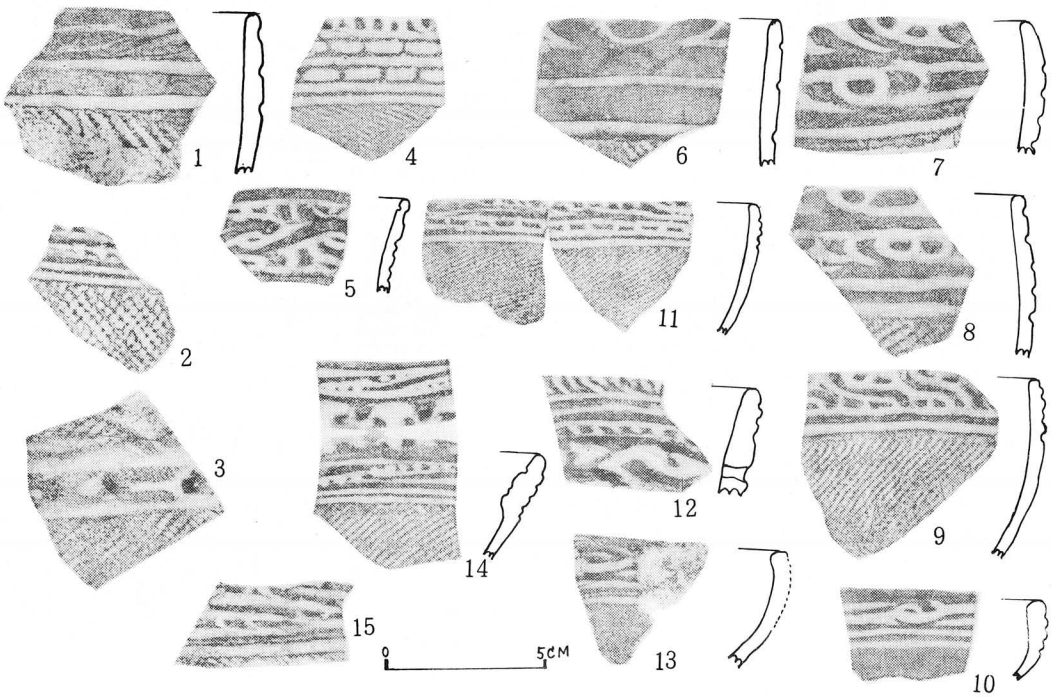
図 版 5



拓影 4


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
0
5CM

拓影 5


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
5CM

拓影 6

模様は、沈線というより彫刻的な手法により羊歯状文、入組文等が描かれる。

本群は半粗製土器が多いが比較的製作が入念で、内部が光沢をはなつものも少なくない。

地文としての縄文は粗製を除いて細かく、密である。

◎第九群土器（拓影7の1～8、同8の2、4～6、図版6の2、3、実測図5）

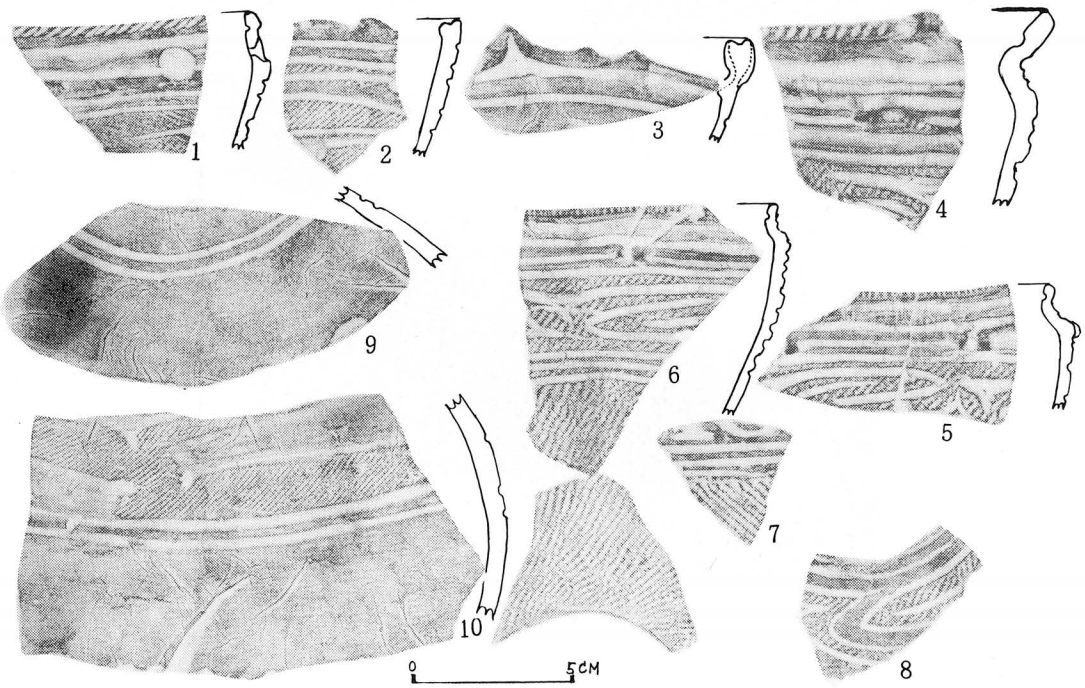
縄文晩期大洞C_1～C_2式に類する土器群。

本群は比較的、甕形、深鉢形等の粗製土器が多く、わずかに精製土器として浅鉢、鉢、壺等が伴なう。又本群に伴なったと思われる蓋形土器がある。（実測図5の2）

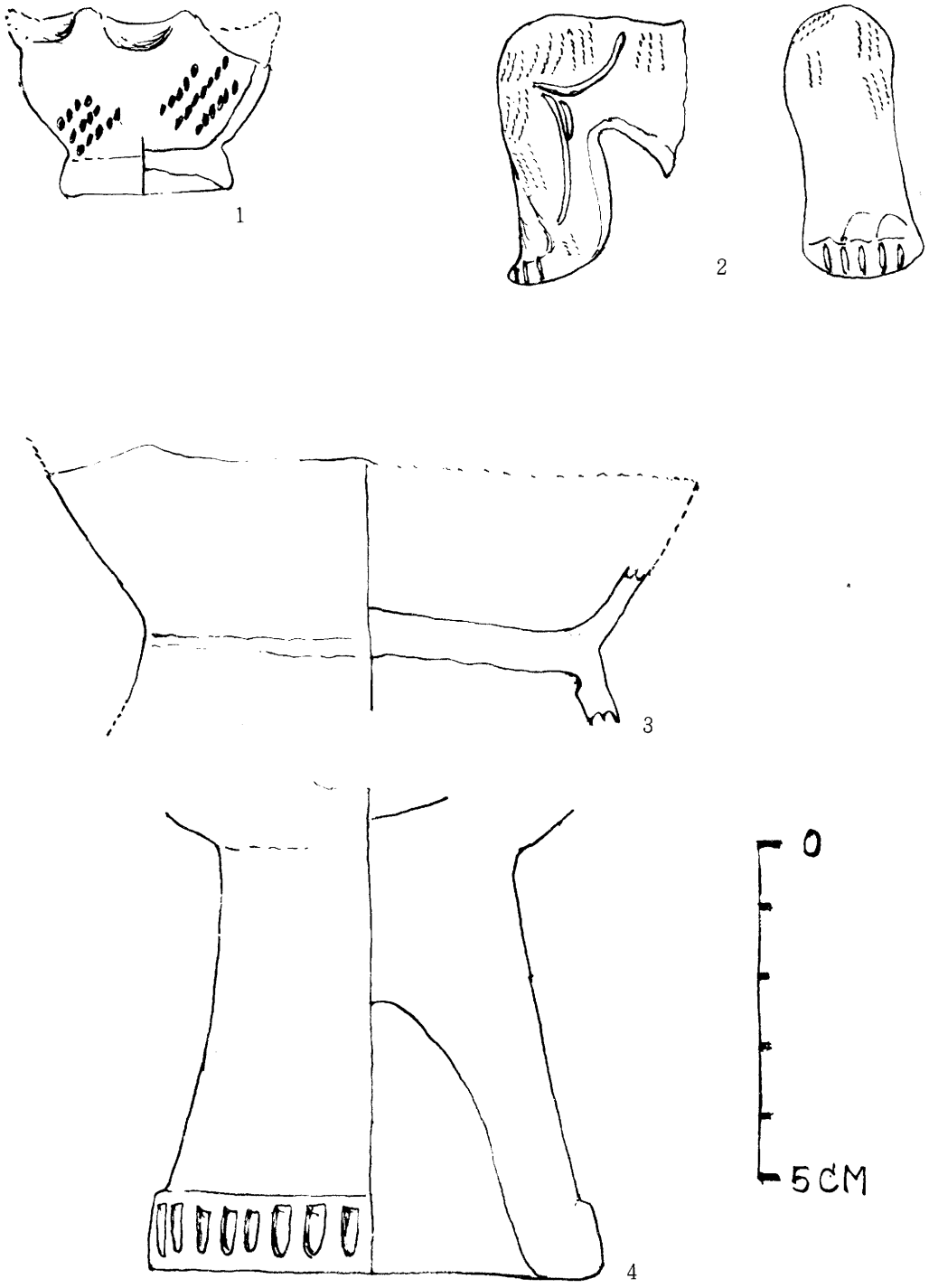
甕は、口縁部がゆるやかな、くの字形に外反し、胴上部に最大径のあるものが多く、口唇部に刻み目をもち口頸部に一～三条の沈線を用い胴部全面に施文される縄文の上限を区切っている。裏面の口唇下に一条の沈線を有するものが多い。粗製深鉢は縄文のみの場合が多く、この前後の時期との区別がつかない。精製土器としての鉢、浅鉢は小形のものが多く、器上半に沈線文、磨消縄文等が見られる。

色調は、黒色、明褐色等を呈し、胎土は精選され、へら磨きも入念に行われ、焼成も良好で、壺形土器の磨消縄文部に丹彩の見られる例がある。

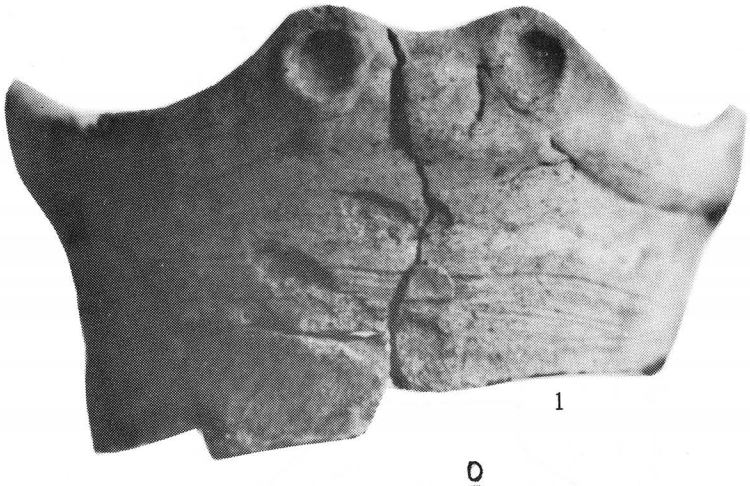
粗製土器の色調は、褐色、暗褐色等を呈し、胎土、焼成は普通である。



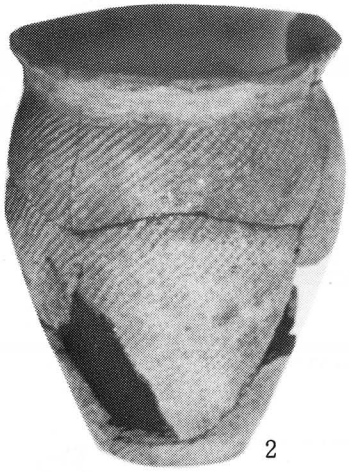
拓影 7



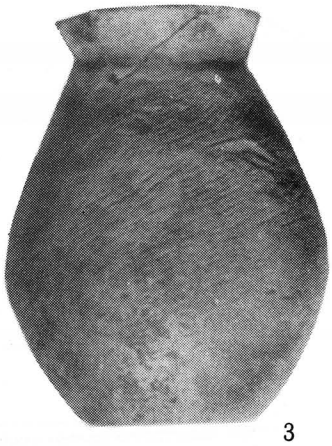
実測図 4



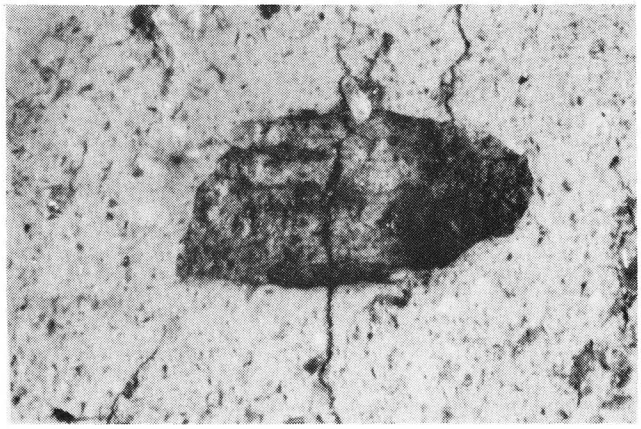
1



2

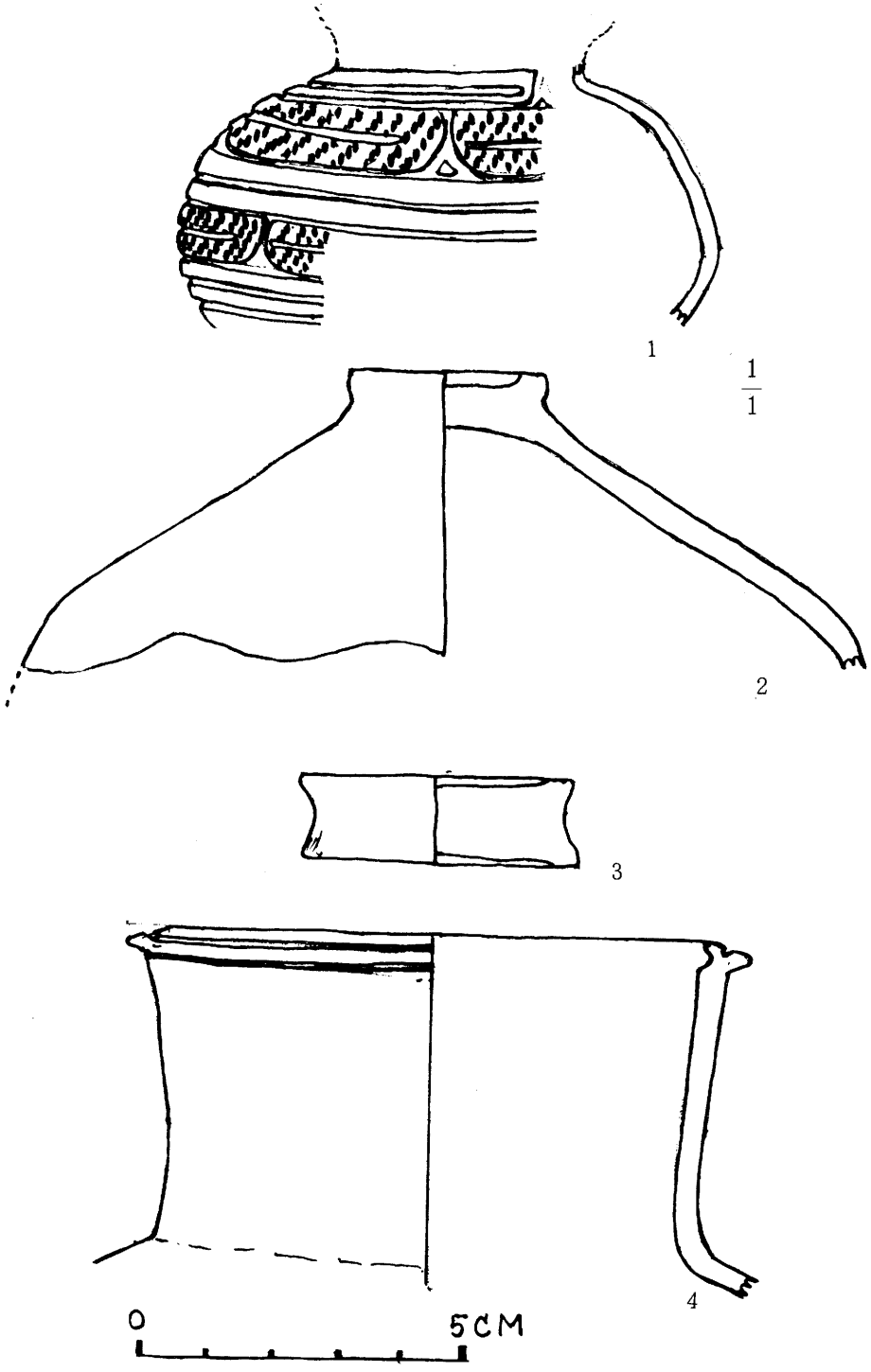


3



4

図版 6　　S 約$\frac{9}{1}$



実測図 5

◎第十群土器（**拓影8の7～9**）

工文字を主体とした大洞A式に類する土器群。資料は第九群に比べて非常に少ない。しかも工字文が初源的で、第九群に近い時期と考えられる。

又、本群に伴なうと思われる甕は、口縁の小突起が退化し、口縁下の沈線も、不明瞭なものになっている。（拓影7の1　3）

◎第十一群土器（**拓影9～12、実測図6の3**）

縄文最終末期の大洞A′式併行の土器群。

本群に類する土器は、本遺跡中、最も多く、後述する甕棺群も本群中に含まれる事から、本遺跡で最も発達した時期であったと考えられる。

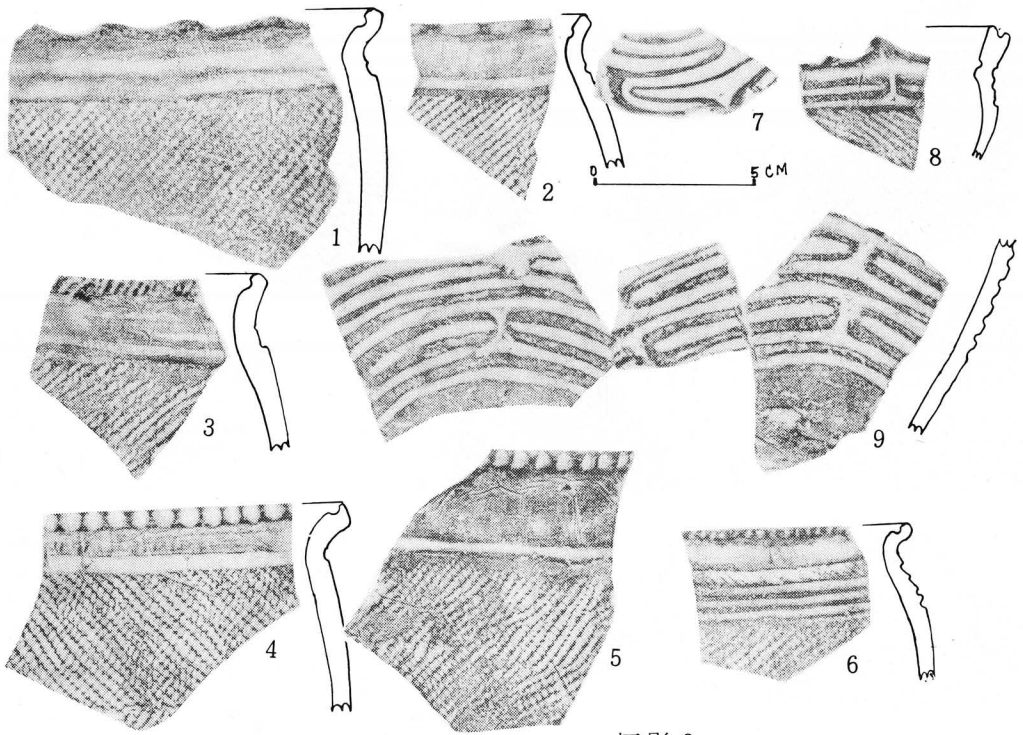
全体を復原できたものはないが、甕、深鉢、壺、四脚土器等の器形を確認した。

高坏は大ぶりな波状口縁又は突起を有し、弯曲した坏部に大きな台部をもつのが一般的で、坏部には、巾広い変形工字文帯が、台部には併行線文が数条めぐっている。

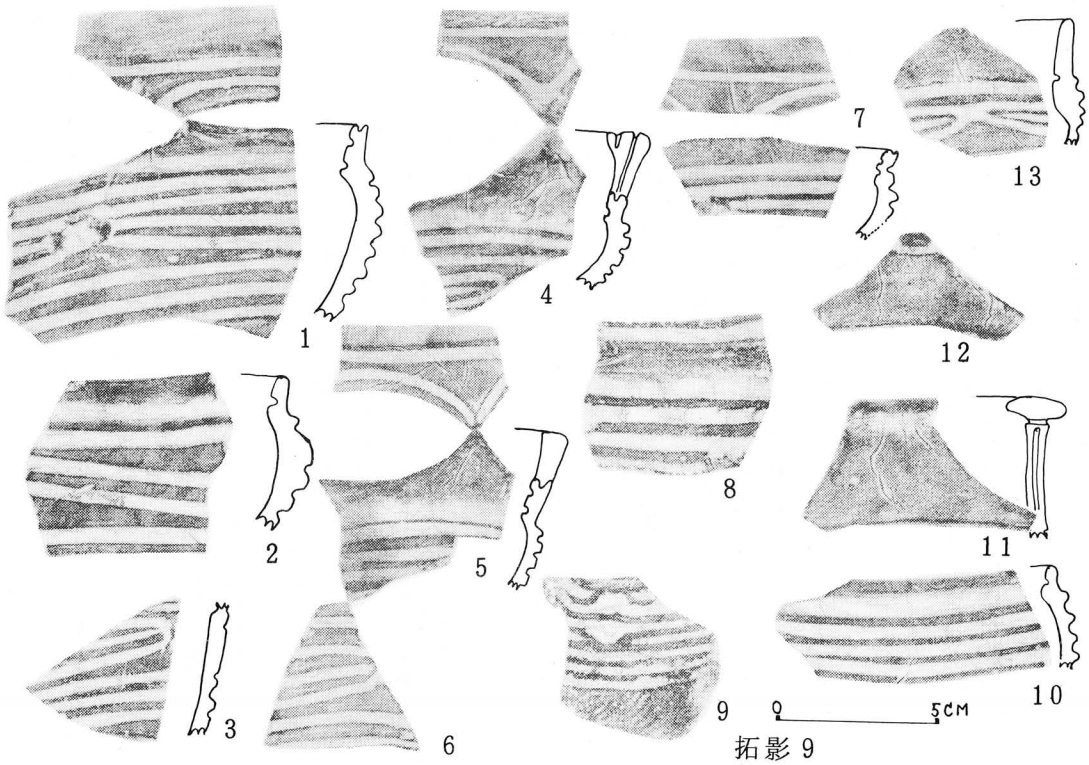
甕は、胴上部から内屈し、口頸部でわずかに外反するものが多く、口縁上部に圧縮された工字文、又は二～三条の併行線文を描き、その下部に斜行縄文を施文する。突起又は刻み目をもつものもある。

深鉢は、口縁上部で、わずかに内傾の傾向を示すものと、ゆるく外傾するものとがある。後者は口縁上部に無文部を残す。

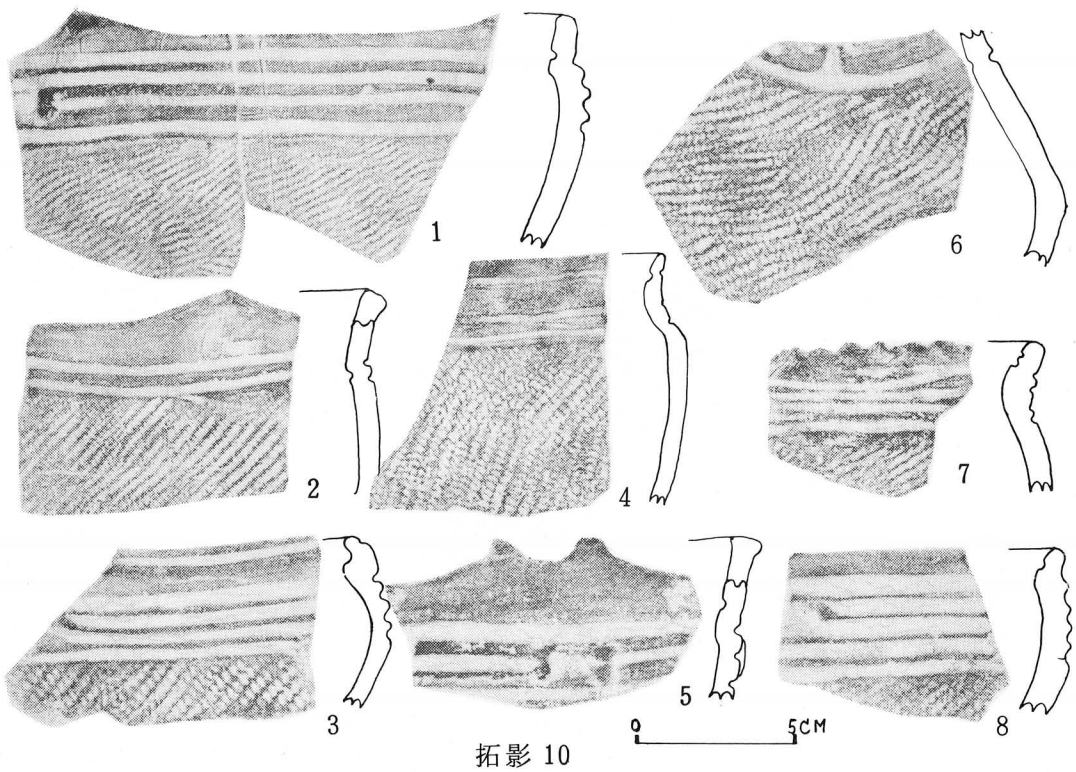
拓影9の9は本群中でも古く、拓影9の11～13は比較的新しい要素をもっている。



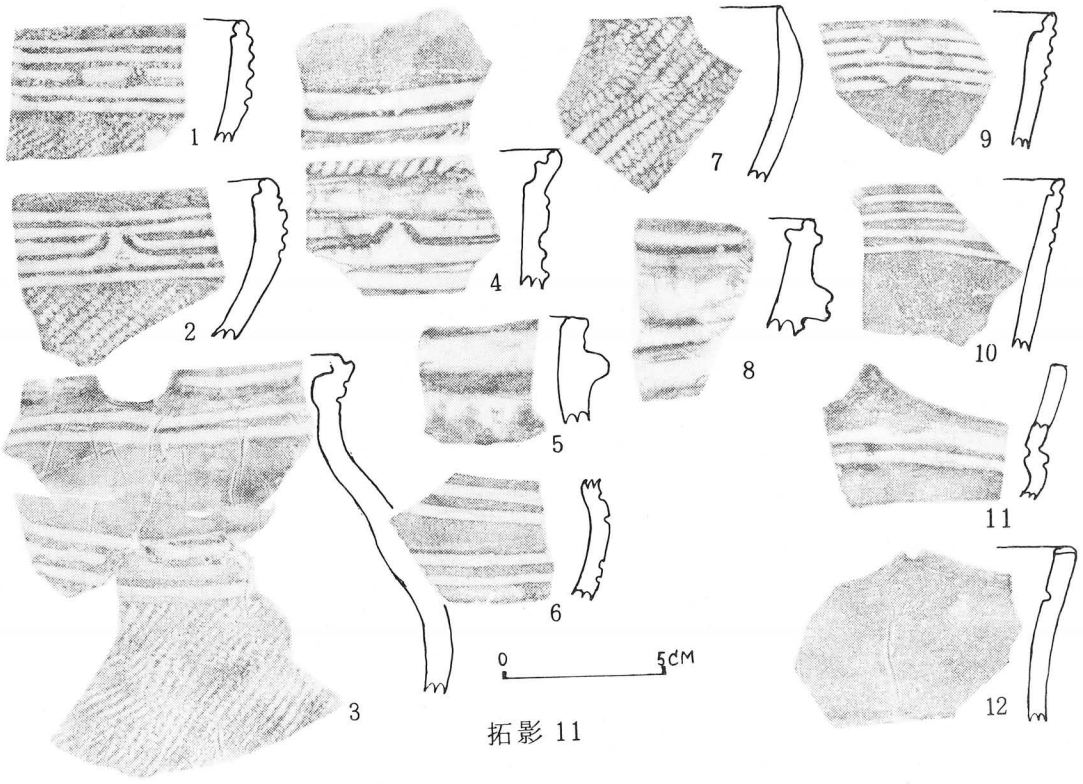
拓影 8



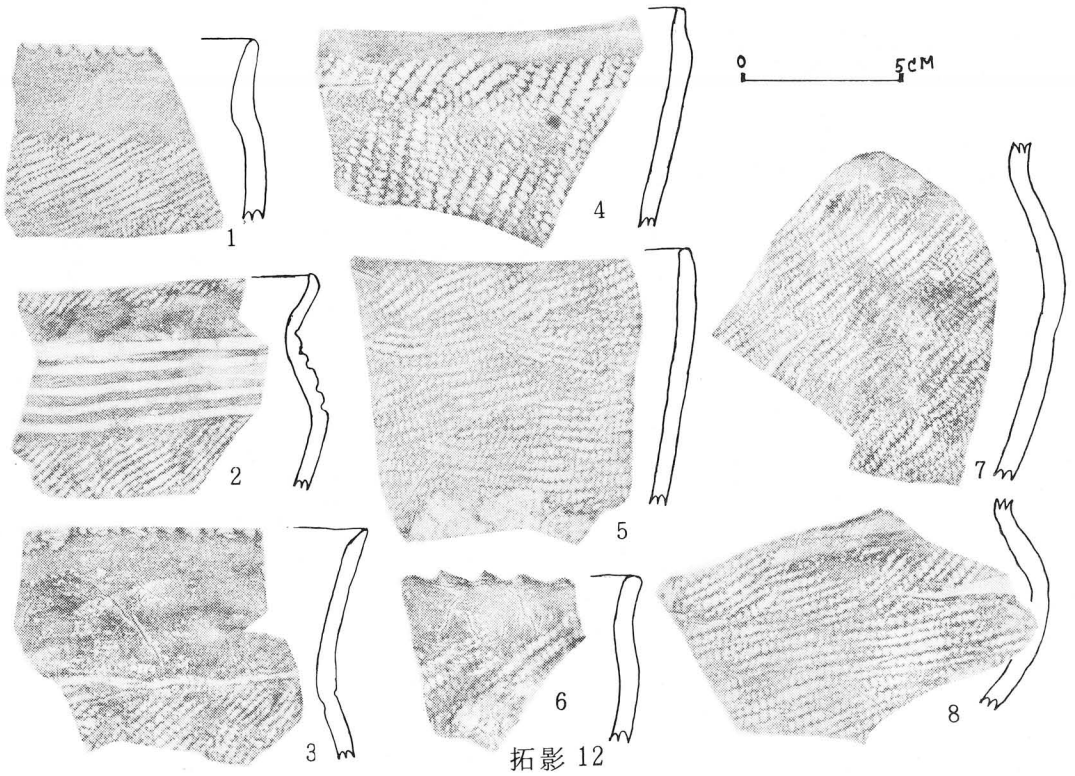
拓影 9



拓影 10



拓影 11



拓影 12

又、本遺跡では、鉢の底部に長さ五～十センチメートルの四脚を有する土器片が多く、大洞A～A′式に於ける特殊な器形の一つと思われる。

◎第十二群土器（**拓影13の1～8、14の6～9、実測図6の1・2**）

工字文が変形して細線化し磨消縄文が、わずかに加わる弥生式初頭の土器群。

拓影13の6～8は高坏台部で弥生期特有の波状文が出現している。本群土器底部には、木葉圧痕が非常に多く、拓影14の9の内面に稲籾に類似の圧痕が見られる。（図版6の4）

◎第十三群土器（**拓影14の1・2、4～5**）

桝形囲式に比定できる土器群で、資料は極めて少ない。14の1の甕肩部にある列点文は、この時期に顕著であるが、大泉式期にも少なくない。14の2、4～5は破片が少さく、果して桝形囲式に含めて良いのか否か、模様の観察のみでは判別できない。

しかし、第十二群土器が黒色、黒褐色、褐色等を呈するのに本群土器は、いずれも、橙褐色、赤褐色等を呈し、第十二群土器と違った感じを受ける。

b、石器

本遺跡から採集された石器には、石鏃、磨製石斧、磨石、凹石、石剣、石棒、独鈷石、刻線礫等がある。但し、各土器群との伴出関係は、刻線礫が大木六～七a式に伴なうという以外、一切不明である。

一、石鏃（**実測図7**）

有柄、無柄、棒状等があり、石質は大部分頁岩、黒耀石製がわずかにある。

二、磨製石斧（**実測図8の1、3**）

実測図8の1は、太形棒状に近い形態を有する。中央部から刃部にかけて、特に研磨が認められるが、刃部は使用に際しての刃コボレが著しい。同3も同様の破損が著しい。定角型に属する。

三、磨石（**実測図8の2**）

略六面体に仕上げられたスリ石で、タタキ石の用途も兼ねたものと思われる。御影石？

四、凹石（**実測図8の4**）

表裏は研磨により、側面は細い敲打によって仕上げられた精製品である。半欠。安山岩？

五、石棒（**実測図9の4**）

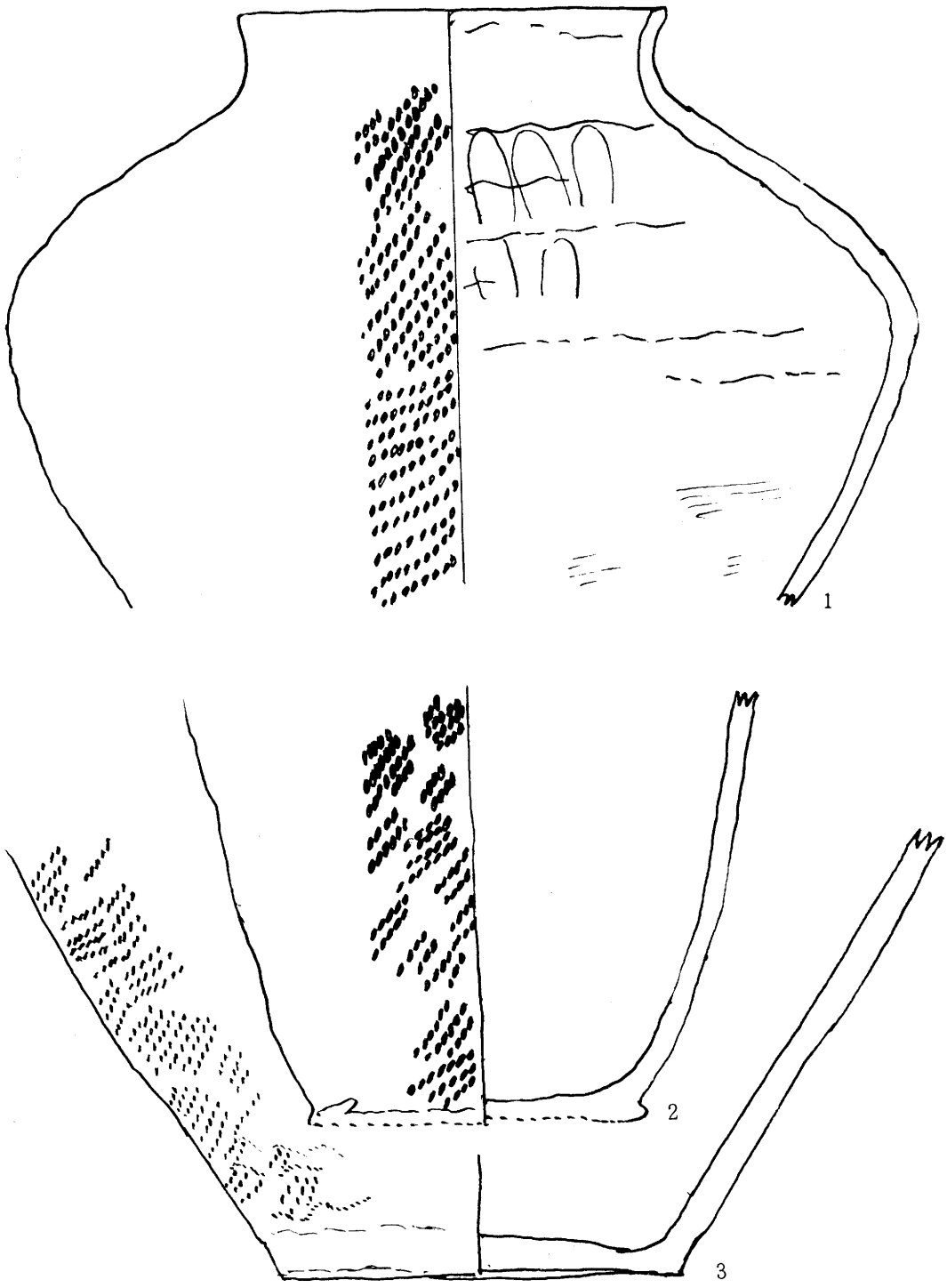
彫刻された頭部をもつ精製小型の石棒、頭頂に敲打の痕跡を残す。

六、独鈷石（**実測図9の3**）

縄文晩期から弥生期にかけて出現する石器で精製品が多い。本例も良く研磨されているが先端部に使用痕を見る。緑色泥岩。

七、石剣（**実測図9の5**）

スレート質の石剣頭部破片。本例は大洞C^2～A期と思われる隆線文土器に伴出した。他に粘板岩？製の分厚な破片二点があ



実測図 6

る。

八、刻線礫（**実測図9の6**）

軟かい石の表面に十字形の刻線の見られる砂岩礫で、側面にも二条の刻線がある。大木六式と大木七a式を出す地点の壁面から採集。

九、丸玉（**実測図9の1**）

乳白色、半欠品、縄文中期以前と考えられる。

土製品

a、土偶手部。模様から縄文後期に伴なうもので、六本指に表現されている。（実測図4の2）

他に、土偶足部と思われる土製品がある。これは残存部約十センチメートルの大形土偶の足部と思われ、大洞B式に見られる入組文が見られる。

b、土製耳飾。臼形を呈し黒色、粗製品。（実測図9の2）

C、自然遺物

一、貝類

現在貝層は全く破壊され、採集不能である。但し遺跡西端部崖面で細片化したオオタニシ、ハマグリを採集、又、昭和四二年開田の際、カラス貝若干が発見された。

江坂氏報告によると踏査時に採集した貝類は次の通り。

淡水産　イシガイ、マツカサガイ、カラスガイ、オオタニシ、

鹹水産　ハマグリ、アサリ、サルボウ

二、鳥獣魚骨及び人骨

手許資料で同定した物は次の通りである。

シカ～下顎骨、尺骨、歯牙、大腿骨、

イノシシ～牙、上顎骨（幼獣）、門歯、

人骨～頭蓋骨、歯？

尚、江坂氏確認の鳥獣魚骨は次の通り。

哺乳類　ニホンジカ、イノシシ、タヌキ、テン、エチゴノウサギ、

鳥　類　マガモ、ハトの一種

両棲類　ヒキガエル

魚　類　コイ、マアジ

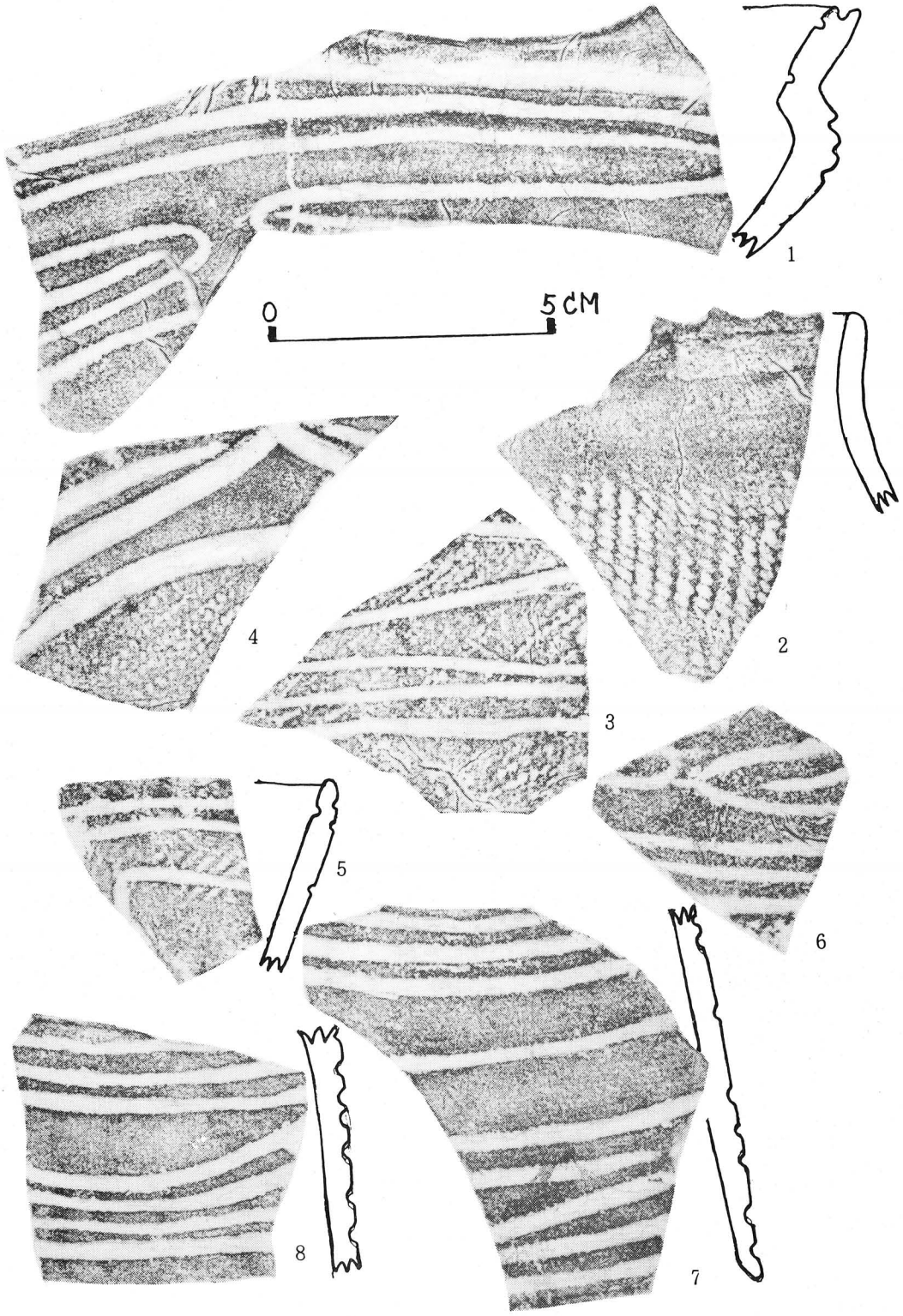
V　甕棺墓（略図2）

昭和四二年開田の際、第二地点より、甕棺の発見された事は後日になって知った。その為に詳しく語る事ができない。幸いに、発見者が現場写真を撮っており、その出土状態をある程度推定する事が可能である。

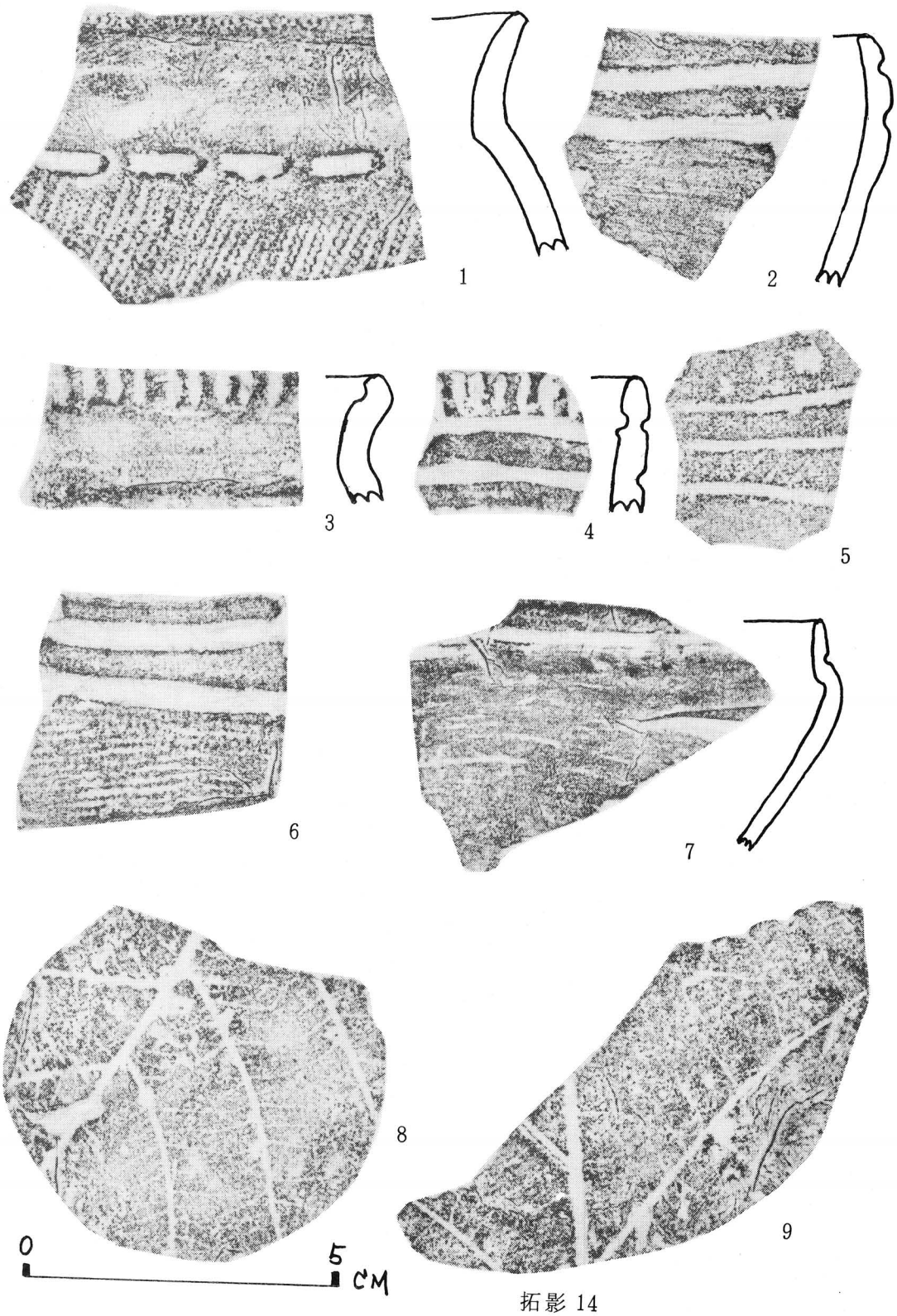
その発見者の口述から略図2を作成した。

◎一号甕棺

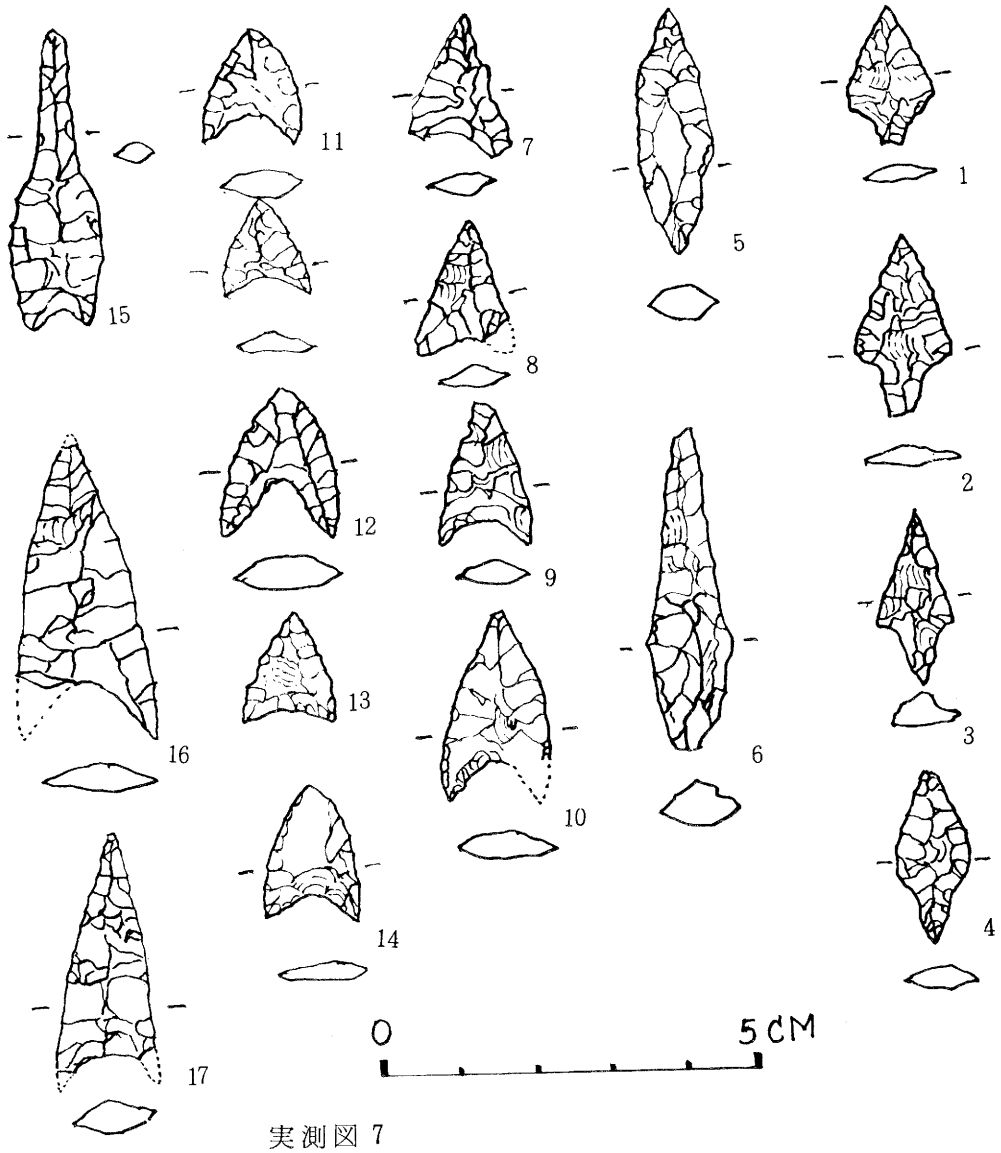
口縁を下に倒立した状態で発見された。墓坑が存在したかどうかは不明だが、少なくとも、墓底に当たる部分は、平にならされていたらしい。底部は欠失しているが故意に破壊されたものか、ブルトーザによって破壊されたものか、恐らく前者と思



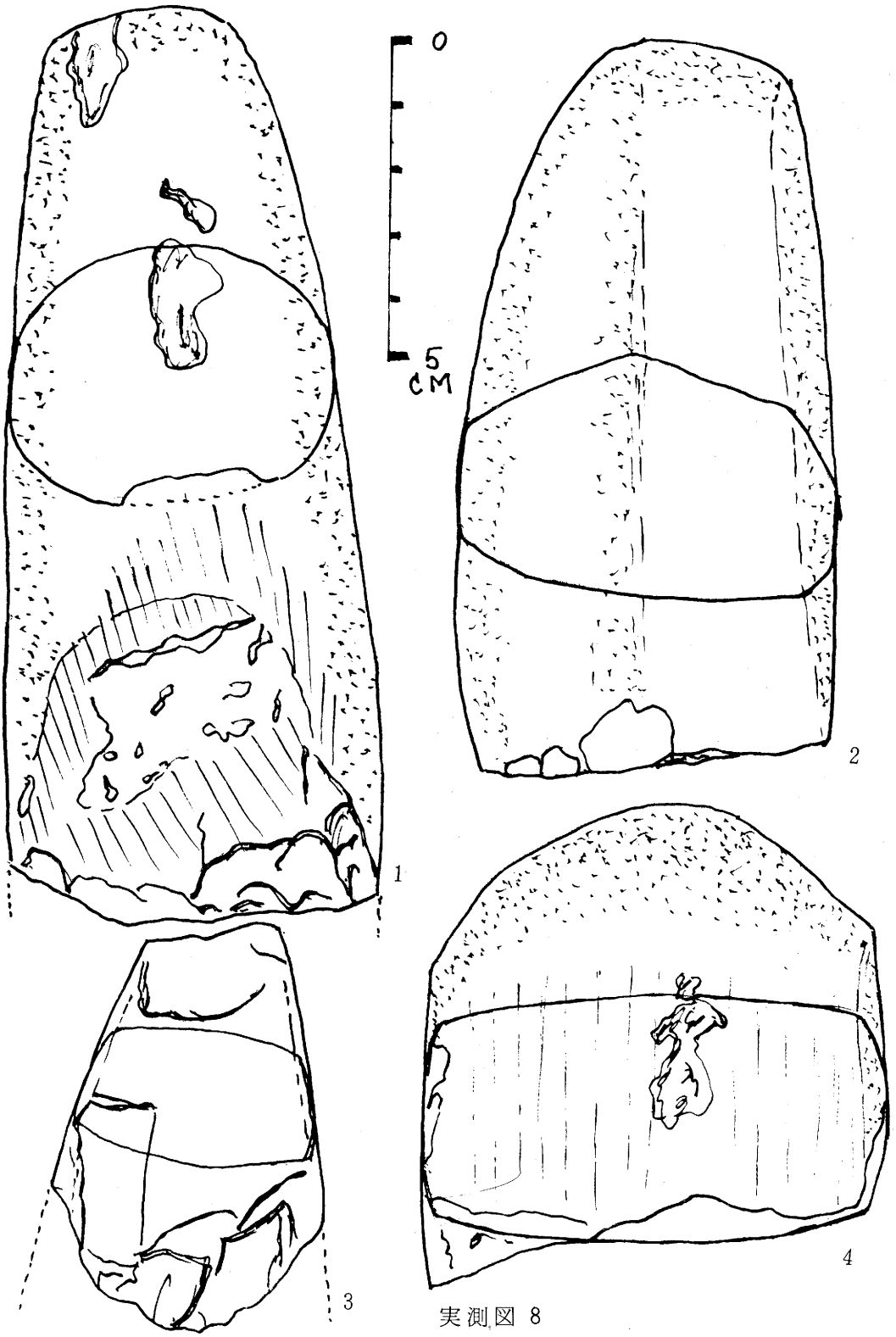
拓影 13



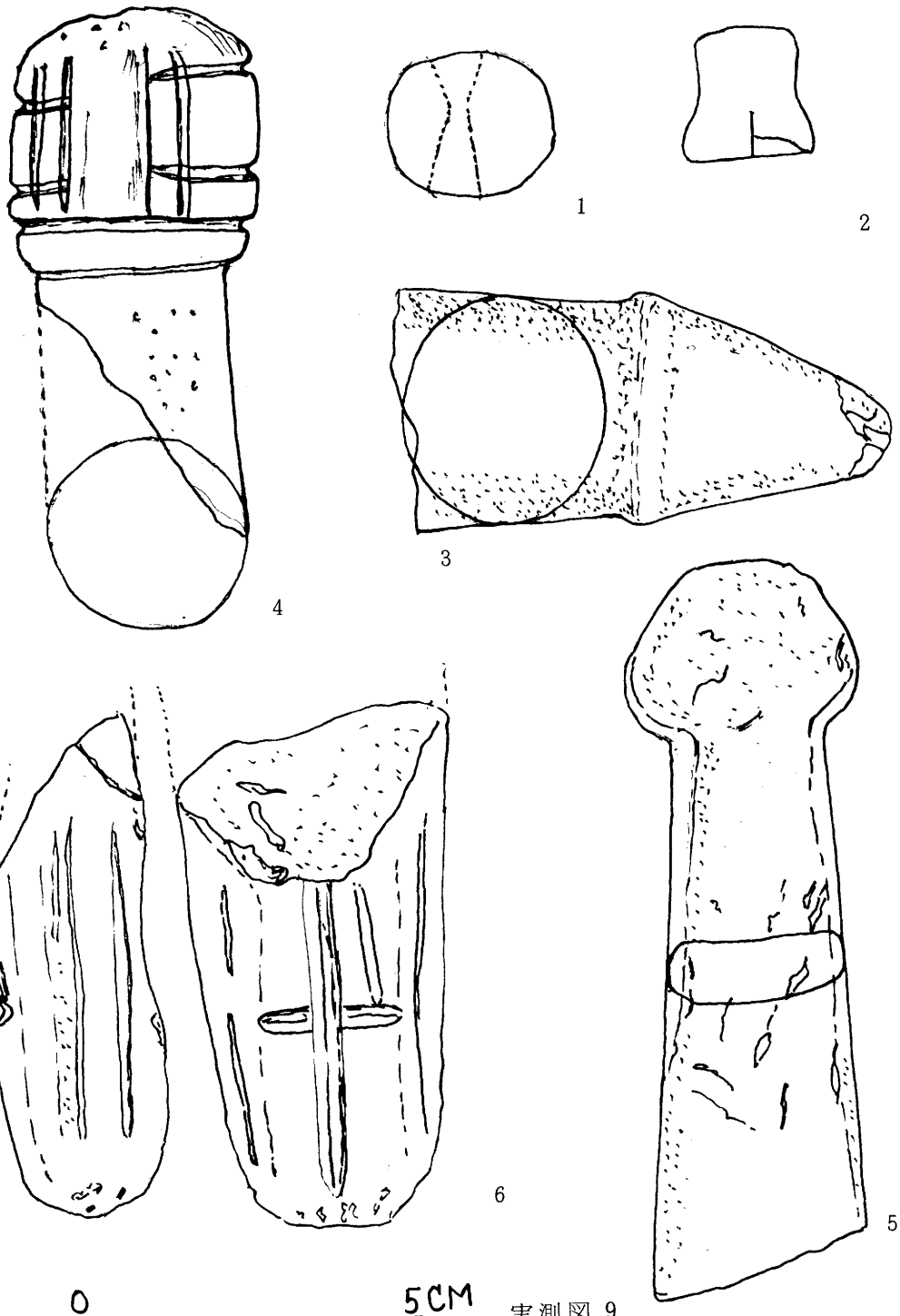
拓影 14



実測図 7

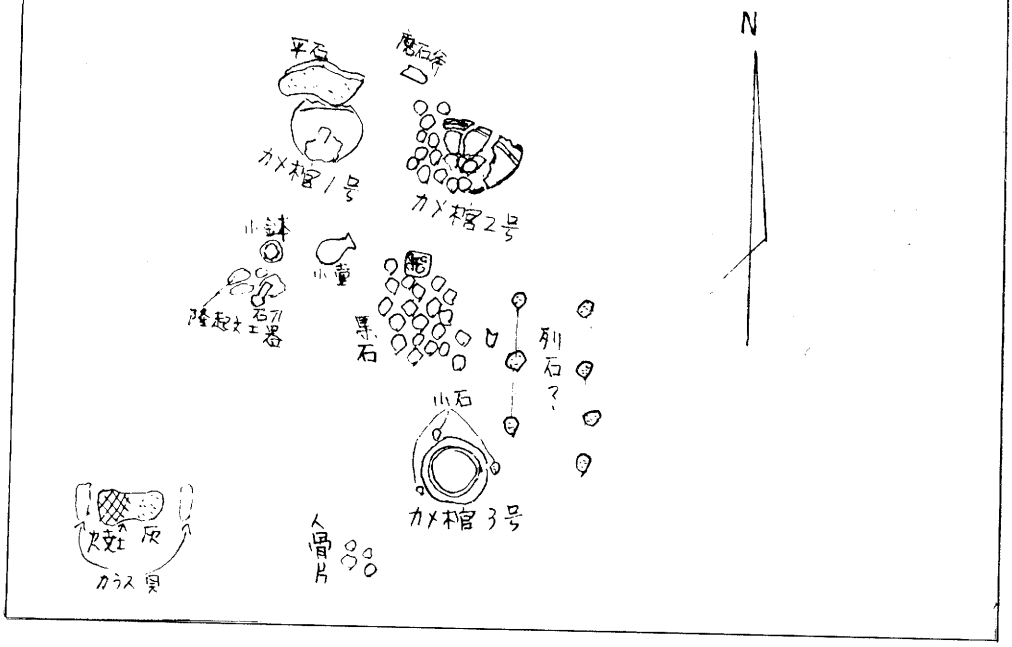


実測図 8



実測図 9

略図2　第二地点　甕棺出土地点略図



われる。甕の北側に、かなり大きい平石があり、或いは甕棺の蓋に使用された事も考えられる。

又、そうすると底部が故意に破壊されていたという事になり後述二号甕棺の例を考慮すると蓋石として使用された可能性は大きい。尚、この土器は現在、行方不明で、底部欠損の状態や欠失底部が附近にあったか否か、埋設に当たっての掘込みの状態も一切知る事が出来ない。

⊙二号甕棺（図版7～9）

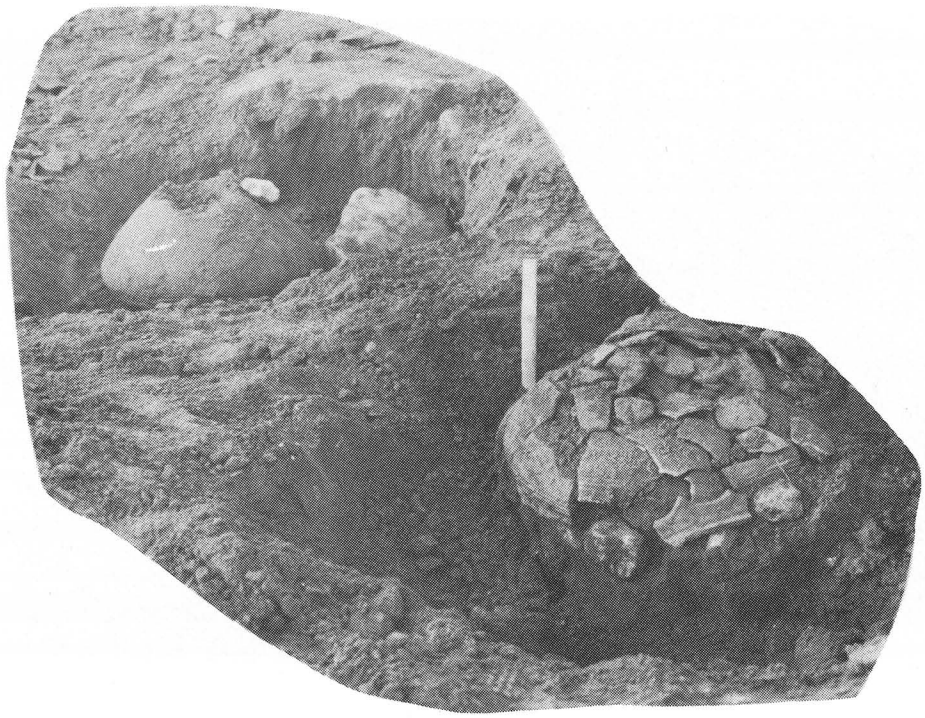
一号甕棺の東南約一、五メートル程の近い位置にある。

甕は、胴部以下を欠き、口縁を下に、径四～五センチメートルの河原石が、あたかも土器を包む様な状態で発見された。甕の上面（すなわち胴下部）には、別個体の土器片が河原石と共に、甕を覆った様な状態で発見された。本土器は当初から胴部下半を打欠き、対象物に恰かもかぶせたと思われる状態で、甕棺周囲及び上面の河原石、土器片等の状況から埋置当初の原形をほぼ、保っていたものと考えられる。

◎三号甕棺

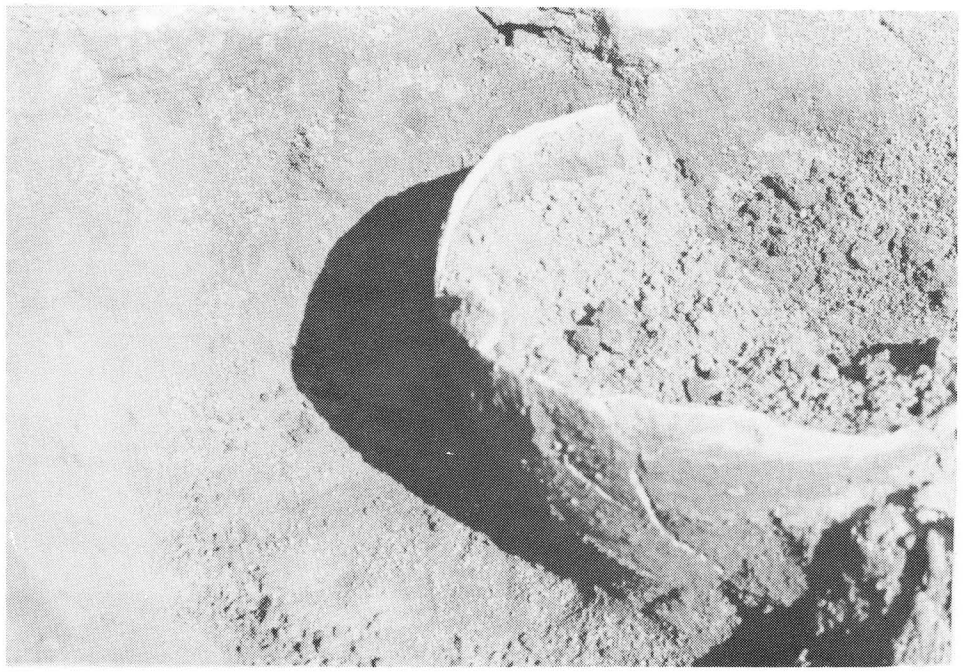
第三号甕棺は、二号甕棺の南東約四メートルの地点にある。

本甕棺は前二例と違って、通常の直立位で発見され、下底部で若干せばまる掘込みが認められた。尚、甕の胴下部の三～四方に土器に密着して、小石が発見されたが、或いは掘り込中の土器を固定させる役割をもっていたとも考えられる。底部に焼成後に行われた径三～四センチメートルの不整円形を呈する穿孔が



図版 7

上　カメ棺1号，2号　東方より
下　〃　〃　北方より



図版 8

上　集石及び配石？
下　カメ棺３号

図版 9

上　カメ棺　1号
下　〃　2号

認められ、甕内部から骨片、管玉を輪切りにした様な滑石製平玉十六個、石鏃一点が検出された。

以上三例を甕棺として記述した。その根拠となるものは、①、以上三例はいずれも故意に埋設（置）された状態で発見され、この場合、底部を故意に打欠いていると考えられる事は、貯蔵用としての目的を果せない。②、いずれも土器内部及び石積？内部から骨片が採集されており、特に三号からは骨片、歯（人）と共に平玉、石鏃が検出され、副葬品としての性格を持つものと考えられる。

尚、一、二号から採集された骨片は細片で同定不能であるが遊佐五郎氏の教示によると、その内の一部は犬科に属するかも知れないと言われた。とすると一、二号と三号の埋葬の相違は非常に興味深いものがある。

又、三号に見られる底部穿孔は、古くは縄文中期にも発見例はあるものの、現時点では縄文晩期から弥生後期にかけて営まれた葬制と一連的なものと考えた方が妥当と思われる。

更に、甕棺として使用された土器は、いずれも縄文晩期終末大洞A′式に属し、甕棺群の周面からは大木六式少量の他は、大洞C_2～A前半期の土器、石器が多量に出土し、大洞A′式は第一地点南半から多量に出土し、第二地点からは、甕棺関係以外、ほとんど見られない。この事は住居と墓地が区別されていた事を思わせ、嘉倉貝塚の場合、恐らく廃棄された大洞C_2～A式期の住居面を破壊して埋葬されたと考えられる。

尚、三号甕棺北側の集石？と列石？については、発見者の観察が乏しく言及できない。

Ⅵ　まとめ

以上嘉倉貝塚の概要を大雑把に整理し記述した。

時間的に制限があり、興野義一、金野正両氏所蔵の資料について触れる事ができず、又、当初甕棺の復原実測図を掲載する予定であったが、上記の都合で果せなかった。そういった意味で嘉倉貝塚の全貌を伝えていないきらいもなくもないが、大勢としては把握したつもりである。

さて、ここで嘉倉貝塚の性格を簡単にまとめてみよう。

①、嘉倉貝塚は、迫川流域に於ける最奥部の主淡貝塚で、縄文前期大木四式期に初まり、弥生中期桝形囲式期に終わる。尚、第二地点と第四地点から数片、ロクロ整形された土師器片が採集されており、平安時代のものと思われる。

貝塚を形成したのは、縄文後期後半から晩期中葉にかけての時期と考えられ、貝層はそれほど発達していなかった様である。

②、嘉倉貝塚は、縄文中期後半から後期初頭の時期を除き、比較的連続して使用された遺跡であり、迫川流域に於いて類例の少ない遺跡と言える。

③、第四群土器は、長者原貝塚、大木囲貝塚三類土器等と同様の内容を有し、出土状態（第一地点北半部から、ほとんど単独にまとまって採集している）、土器群の諸特徴等から興野氏提唱による、大木四式と同六式をつなぐ、大木五式の後半型式としての大木五b式の設定は、本遺跡に於いても極めて妥当なる

事を示唆している。

④、第二地点から発見された甕棺群は、住居とやや離れた地点に墓域を形成し、少なくとも三基の甕棺が認められ、恐らく附随したものと思われる集石一ヶ所と、不確実な列石？一ヶ所とからなっていたと思われる。第三号は直立位、底部穿孔副葬品伴出という特徴を有し、第一、二号は倒立位、底部を故意に欠き平石、小石をもって蓋とし、対象物に対し前者では内部収納後者は、被覆を目的としたものと考えられる。又、第三号は人骨、第一、二号は動物（家犬等）という様に区別して葬ったことも考えられる。

Ⅶ　おわりに

この発表を為すに当って、種々御高配に預った築館町文化財保護委員、金野正氏に厚く御礼申し上げます。

又、学問的な御教示を頂いた日本考古学協会員、興野義一博士、東北大学考古学研究室須藤隆助手、宮城県教育庁文化財保護室　藤沼邦彦技師の各氏に衷心より厚く御礼申し上げる。

（昭和四十八年二月稿）

主要参考文献

昭25　江坂輝弥「北上川流域最奥部貝塚の調査」　貝塚29
土曜会

昭30　江坂、酒井、柏倉、加藤「吹浦遺跡」

昭31　吉田義昭「甕棺と思われる縄文文化中期の土器群」
石器時代三

昭　興野義一「迫川流域の石器時代文化」仙台郷土研究18の3

昭32　伊東信雄「宮城県史一、古代」宮城県

昭34　井上義安「北茨城市足洗における甕棺調査の概報」古代32

昭36　伊藤玄三「東北日本に於ける弥生時代の墓制」文化25―3

昭37　後藤勝彦「宮城県台囲貝塚出土の土器」考古学雑誌48―1

昭　伊藤玄三「敷味貝塚」宮城県文化財調査報告

昭40　林謙作「縄文文化の発展と地域性――東北――日本の考古学II
昭43　小笠原好彦「東北地方南部に於ける前期末から中期初頭の縄文式土器」　仙台湾の考古学的研究
昭43　高倉淳「宮城県気仙沼市磯草貝塚出土の土器について」　右に同じ
昭　西村正衛「縄文中期文化、東北、関東」新版考古学講座3
昭44　伊東信雄他「長根貝塚」宮城県文化財調査報告第19号
昭42～44　興野義一「大木式土器理解のためにIV～VI」孝古学ジャーナル24、32、48
昭45　興野義一「大木五b式土器の提唱」古代文化22―4
昭46　草間俊一、金子浩昌両著「貝鳥貝塚」

追加

一、図版6の4に掲げた拡大写真は、拓影14の9に示した底部片の内面に見られる圧痕で、当初の肉眼観察では、籾圧痕にほぼ間違いないという意見が多かったが、顕微鏡観察の結果、圧痕部が磨滅してないにも拘らずネットが観察できず、籾圧痕ではない事が判明。一応参考までに掲示した。

本観察には、須藤隆氏の手をわずらわせた。

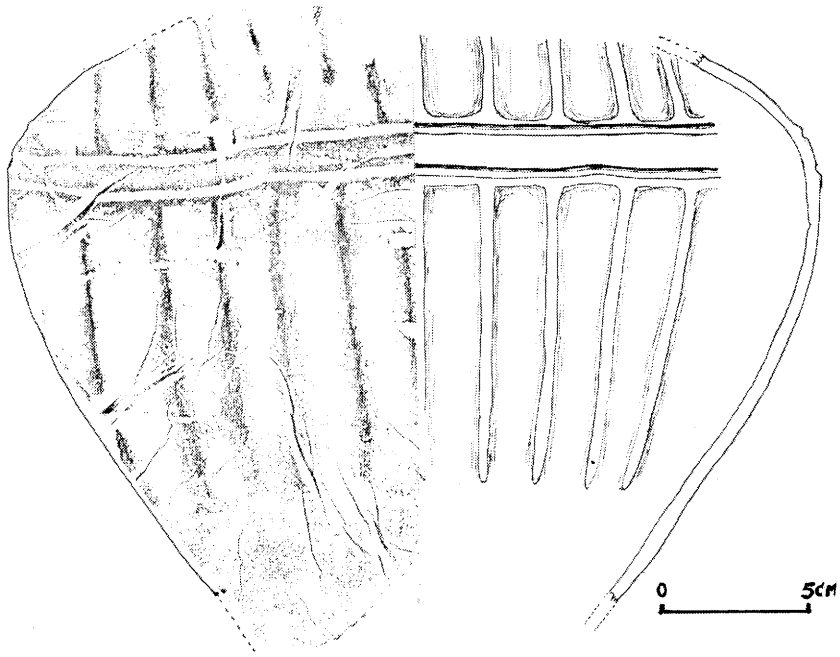
二、**実測図10**は、第二地点甕棺附近から採集したものである。

器形は胴上部に最大径のある比較的胴の張った壺形土器で、口縁部はかなり強く外反するものと推定できる。模様は、縦位の微隆起線文が全面に見られるが、胴部最大径部分に二条の沈線文をめぐらし、微隆起線文を上・下の二段に区切っている。本来微隆起線文は、胴上部から胴下部まで一連のものであったのを、肩部の部分に巾約一・五センチメートルの無文部を作り、その両端に太い沈線文を廻らし、上、下を画したものである。色調は褐～灰褐色を呈し、焼成は悪くない。

この土器に附された縦位の微隆起線文の手法は、一種独特のもので従来報告された例を聞かない。藤沼邦彦氏の教示により、宮城県沼津貝塚と同山王遺跡から出土している事を知り、更に神奈川県杉田遺跡からも発見、発表されている事を知り得た。山王遺跡では縄文晩期大洞C^2～A式の層から発見されたといわれ、杉田遺跡出土例も、東北地方の大洞C^2～A式に併行するとされる杉田D類土器に含まれている事実、更に本遺跡でも第二地点西側の大洞C^2～A式期を主体とする地点から発見された事等も考慮すれば、この種の土器は大洞C^2～A式に伴なう特殊土器の一例という事ができよう。

参考文献

杉原荘介、戸沢充則「神奈川県杉田遺跡及び桂台遺跡の研究」考古学集刊2の1



実測図 10

あとがき

最近、郡内の各地で圃場整備事業や開田工事が進められているが、祖先の残した遺跡は、未調査のままこの事業が進められて、これら遺跡が破壊されている例が少なくない。本町でも玉荻台遺跡、嘉倉貝塚等は、その正確な把握もむずかしくなってきている。

そこで、県内でも貴重な嘉倉貝塚の調査報告を、本町西町に住む佐藤信行氏を煩わして、ここにまとめた。この報告は、本格的な発掘調査に依ったものでなく、ブルトーザによる開田工事でかき乱されたあと、表面採集したものによってまとめたもので、全体としてみれば、不確実な点は免れない。しかし、今この報告を残さなければ、嘉倉貝塚は町内から、また県内から永久に忘れ去られてしまうだろうと考え、不確実であるという非難を省みず、あえてこの報告を刊行した次第である。表面採集した遺物については、できる限り正確を期したことは勿論であるが、この報告をまとめた佐藤信行氏の御尽力に敬意を表する。

（文責　金野　正）

昭和四十八年二月

築館町文化財保護委員会

昭和四十八年二月十三日　印刷
昭和四十八年三月二十日　発行

編　集　築館町文化財保護委員会
印　刷　宮城県築館町南小山六四
　　南部屋印刷株式会社
発行所　宮城県築館町字町裏六〇の二
　　築館町教育委員会事務局